



あさや きゅうぶん ごもり きかんこ
朝焼けの旧豊後森機関庫

日本童話祭(久留島武彦顕彰)

第四十三回全国児童生徒俳句大会

入賞・入選句集

選者

牧野 桂一先生

秋篠 光広先生

九州・沖縄から



POWER OF CULTURE

第四十三回全国児童生徒俳句大会に寄せて



全国児童生徒俳句大会実行委員会顧問
大分県玖珠町長 宿 利 政 和

大分県玖珠町は、「日本のアンデルセン」と称された口演童話家、久留島武彦の故郷であり、「童話の里」として全国に知られています。久留島武彦の人が人として共に生きる上で、不可欠な教えを楽しいお話にして、子どもたちに語り聞かせた久留島精神は、今もこの町に深く息づいています。

玖珠町が「童話の里」として、子どもたちの夢を育む場所であると同時に、全国の子どもたちが俳句を通して感性を磨くこの大会の開催地であることは、決して偶然ではないでしょう。毎年五月五日には、日本童話祭が盛大に開催され、本大会もその重要な一環として、全国の子どもたちの俳句への情熱を育んでいます。

今回の第四十三回大会では、応募総数一〇、六四四句、四、六〇七人の児童生徒の皆さまから投句をいただきました。本大会は今や、国内にとどまらず海外の日本人学校からも応募いただく大会となり、累計投句数は五十一万句を超える投句数となっています。

久留島武彦の座右の銘である「継続は力なり」の言葉のとおり

り、本大会が昭和五十九年から毎年開催され、四十年以上の歴史を重ねてきたことにも表れていると言えるでしょう。

俳句は、五七五の短い音の中に、自然の美しさや日常の何気ない瞬間を凝縮し、読む人の心に響かせます。厳正な審査により選ばれました入賞・特選・入選句を、「入賞・入選句集」として皆さまにご紹介できることを嬉しく思います。この句集を手にする皆さまは、投句いただいた児童生徒の豊かな感性に触れ、俳句の持つ魅力、子どもたちの無限の可能性を感じていただけることでしょう。選句にあたっては、とりわけ長きにわたる携わっていただいております選者の牧野桂一先生、そして俳人協会名誉会員の秋篠光広先生にご尽力をいただきました。ご多忙の中、誠にありがとうございました。

この大会を通して、子どもたちが言葉の持つ力、表現する喜びを感じ、豊かな心を育んでくれることを願っています。そしていつまでも俳句を愛し、折に触れて言葉で感動を表現してくれることを願っています。

今後もここ玖珠町が「童話の里」として、児童文化の振興に寄与していくことをお約束し、玖珠町を代表してのあいさつと致します。

令和八年五月四日



日本童話祭（久留島武彦顕彰）
第四十三回 全国児童生徒俳句大会

入賞句

日本童話祭ジャンボこいのぼり

久留島 武彦 賞

やぎさんにたべられちゃったママのふく

大分県

岩田 光来

玖珠町立塚脇小学校 1年

朗 人 賞

戦争は水鉄砲ですればいい

徳島県

中村 拓夢

徳島文理中学校 2年

紘 文 賞

つるつると箸から逃げる心太

大分県

河野 とうこ

大分県立玖珠美山高等学校 3年

桂 一 賞

夏休みじいじといっしょにつるをおる

大分県

小野田 怜花

玖珠町立塚脇小学校 2年

大分県知事賞

〔小学生の部〕

雪女みかんを一緒にどうぞですか

東京都

山田朝子

葛飾区立柴原小学校 6年

〔中学生の部〕

サイパンの戦争跡と夏の空

栃木県

加藤広隆

宇都宮短期大学附属中学校 1年

〔高校生の部〕

鉛筆の鋭き影や冬夕焼

岐阜県

藤田有祐美

鶯谷高等学校 2年

大分県教育長賞

〔小学生の部〕

会場が沖なわになる運動会

大分県

溝辺よつ葉

大分市立大在小学校 4年

〔中学生の部〕

終戦日「忘れるな」と鳴る鐘の音

福岡県

松岡瑞葉

筑紫野市立筑山中学校 2年

〔高校生の部〕

立秋の斜陽が照らすレモンテイク

大分県

清水翔太郎

大分県立玖珠美山高等学校 2年

玖 珠 町 長 賞

〔小学生の部〕

カマキリになまえをつけてかわいがる

大分県

山 下 鼓 登

玖珠町立八幡小学校 2年

〔中学生の部〕

沖へ出て動かぬ漁船鰯雲

大分県

篠 原 康 希

大分県立大分西中学校 3年

〔高校生の部〕

豆の花天までのぼれジャツクの木

大分県

井 上 遊 太

大分県立玖珠美山高等学校 3年

玖 珠 町 議 会 議 長 賞

〔小学生の部〕

せん風きおばけみたいなあいうえお

富山県

舟 本 匡 吾

高岡市立伏木小学校 2年

〔中学生の部〕

茶を点てる祖母に教えを乞うた夏

福岡県

早 川 美 結

古賀市立古賀東中学校 2年

〔高校生の部〕

永き日のリュツクのままの駅ピアノ

岐阜県

杉 山 慶 多

鶯谷高等学校 3年

玖珠町教育長賞

〔小学生の部〕

敗戦忌せみのぬけがら手にのせる

大分県

志村優衣

大分市立大在小学校 6年

〔中学生の部〕

筆箱の中身パンパン夏休み

岐阜県

加藤龍之介

川辺町立川辺中学校 1年

〔高校生の部〕

山笑う紙飛行機の始発便

山口県

島村佳希

山口県立下松工業高等学校 3年

大分県俳句連盟会長賞

〔小学生の部〕

ほかほかの焼き芋食べてはひふへほ

東京都

アナスアルマウドウディ

友愛インターナショナルイストラミックススクール 6年

〔中学生の部〕

強力なスマッシュ一本風薫る

福岡県

岩継丈育

古賀市立古賀東中学校 2年

〔高校生の部〕

アテンション・ゴー八月の水重く

東京都

水上颯

中央大学杉並高等学校 1年

大分県小学校校長会賞

秋高し相手の玉はよく入る

大分県

梅本

大分市立大在小学校 4年

唯

大分県中学校校長会賞

母にまた嘘ばれてゐる曼珠沙華

岐阜県

岡部 莉央

鶯谷中学校 2年

大分県立学校長協会賞

春の雨古書のおいを呼び覚ます

兵庫県

幸山 啓人

神戸市立須磨翔風高等学校 1年

読売新聞社賞

天の川星のまんいん電車くる

大分県

阿南 俊助

竹田市立祖峰小学校 3年



第43回全国児童生徒 俳句大会に寄せて

選者 牧野 桂一

全国児童生徒俳句大会が、今年も海外からの応募も含め、四、六〇七人から一〇、六四四句もの投句を得て、盛大に行われますことを、私たち選者も大変嬉しく思います。

例年このように「日本童話祭」に協賛して行われる本俳句大会は、今年で四十三回目を迎えます。そして第一回大会から今大会まで、全国から投句していただいた俳句の数は、なんと五十一万句を超えました。考えてみると、この五十一万句という投句数は、他の児童生徒を対象とした俳句大会の投句数に比べても、群を抜いて多くなっています。これだけ大きな規模で、四十年を超える長い間、俳句大会を続けている所は他に例がありません。このように盛大に俳句大会が開催できますことを、この大会に投句された皆様方とともに、運営を支えている方々に感謝し、共に喜び合いたいと思います。

今回の俳句大会において、全国の小・中学校、高等学校の皆さんの他、スイスのチューリッヒ日本人学校からも、貴重な作品を寄せていただきました。寄せられた一人一人の作品には、それぞれの国や地域の自然の美しさ、人々の優しさが満ちあふれていました。そこには、日々の生活の中で実際に体験したこと、発見したこと、平和や戦争に関して学んだこと、友達とともに活動したこと、そして嬉しかったことなどが、感動的にそれぞれ

の言葉で詠み込まれていました。それぞれの地域と風土に根ざした感銘深い体験や平和を願う切実な活動が、五七五という俳句の伝統的なリズムに乗せられ、若々しい希望に満ちた感性で訴えられており、読む人を深く感動させるとともに、力強く励ましてくれます。

またこれらの作品には、投句してくださいました皆さんが、学校や公民館の俳句教室の中で素敵な仲間とともに魅力溢れる先生に出会って、楽しく俳句を学んでいる姿も生き生きと伝わってきました。それらの一句一句を丁寧に読んでいくと、私たち読者も次の世代を受け継いでいく皆さんと同じ時代を過ごしていることを確かに実感させられ、未来を共に生きていく勇気が湧いてきます。そしてここに寄せられた作品には、八十六年の生涯のうち六十年の間、「お話は子どもの生命の糧だ」という信念のもとに、世界中を隈なく歩き、子どもに夢と希望と勇気を与え続けてくれる久留島武彦先生の深い思いがしっかりと受け継がれていることを教えられ、とても嬉しく思います。

今回もこのようにして寄せられた一人一人の作品を直接読む貴重な機会をいただきましたので、その感謝も込めて、選者を代表して入賞した作品の幾つかについて、私の感じたことを紹介させていただきます。作品が創り出す素敵な世界を共に味わってみたいと思います。

久留島武彦賞
やぎさんにたべられちゃったママのふく

玖珠町立塚脇小学校 1年

岩田 光来

ここに出てくるやぎ(山羊)は、歳時記には載っていないことが多いので、やぎだけでは季語にならないという人もいますが、実はやぎだけで春の季語として扱われる例は幾つもあるのです。それは多くの動物と同じように、山羊も春になると赤ちゃんが生まれるからです。そのため「子山羊」が周りの人たちに春の訪れを感じさせ、春の象徴として見られるようになったのです。親の山羊もその子連れられているイメージや、春の野原で草を食べているのかな様子から、春の季語として分類されるようになったのです。このようなことから、私もここでの山羊は、春の季語として受け止めました。言葉に季語としての力と働きがあるからです。それにしても「やぎさんにたべられちゃったママのふく」というエピソードは、とてもほほえましく目に見えるようで、この場面に惹きつけられ笑ってしまいそうです。やぎに服を食べられてしまったママにしてみると笑い事ではないちよつと困ったことかもしれないませんが、このエピソードは光来さんにもママにも一生忘れることのできないくらい印象の強い物語として心に刻まれて残ると思います。

やぎは、古くから私たち人類に親しまれてきた家畜ですが、このやぎに喜んでる人の写真と怒っている人の写真を見せると、その区別ができると思います。ヤギは人間の表情から優しい人であるかどうかを見分

けられるのです。光来さんのお母さんの服を食べたのは、光来さんのお母さんがとつても優しいので、山羊もお母さんと思って甘えていたのかも知れませんか。

朗人賞

戦争は水鉄砲ですればいい

徳島文理中学校 2年

中村拓夢

この俳句は、「水鉄砲」が季語として大きな働きをしています。世界各地の戦争に目を向けると、今もミャンマーやウクライナ、ガザ地区などで戦争が絶えません。ここでは多くの人たちが殺され、飢えに苦しんでいます。拓夢さんはこの戦争の現実に向かって、「戦争は水鉄砲ですればいい」と言い切っています。十七音という短いメッセージですが、この言葉にはどのような兵器にも負けない強さがあります。

ここでいう「水鉄砲」とは、筒の先から水を押し出して飛ばして遊ぶおもちゃで、俳句では夏の季語になっています。この水鉄砲は、日本では古くから竹筒の先から水を噴き出すものが伝わってきており、「水弾（みずはじき）」とも呼ばれていました。この水鉄砲は子どもの遊びだけでなく、実は大人が使う実用的な消火器として利用されてきた歴史もあります。現代では水遊びや爽快感から、夏も広く楽しまれ、水を掛け合う爽快感から、夏の子どもの遊びとしてとても人気があります。地域によっては学校などで子どもたちにも竹製の水鉄砲の作り方を教えるイベントも行われています。子どもたちは大人たちと水鉄砲をしながら、地域の文化や生活の知恵を

楽しく学んでいます。

この俳句は「誰も死なない戦争」「弾丸の代わりに水をかける」と、大人では思いつくことのできない、純粹で突飛な水鉄砲を提示することで、世界中で起きている残酷な戦争を風刺し、強く批判し、殺し合いの愚かさを浮き彫りにして、多くの人々の共感を呼ぶ作品です。

絃文賞

つるつると箸から逃げる心太

大分県立玖珠美山高等学校 3年 河野とつこ

この俳句は、心太を箸で掴もうとすると、つるつると滑ってなかなか掴まれない様子をつるつると箸から逃げる」と、人のように表現してとてもユーモラスです。そしてこの「つるつると箸から逃げる」ということから、夏の心太の涼しい味と、なかなか箸に掴まらなくて、逃げて掴まむことができない様子が、親しみやすく面白く読む人を笑いの中に誘い込めます。

この句をよく見ると、夏の季語である「心太」が中心になっています。この心太は、テングサを煮溶かして型に流し、寒天質を冷やし固めて作られます。全体の九十八パーセント以上が水分で、あとの残りのほとんどは多糖類です。透き通って透明感があり、見た目にもとても涼しく感じ、夏には多くの人が好んで食べます。食べる時には酢醤油や黒蜜をかけて、和辛子などを混ぜて食べます。つるりと喉に流し込むその独特の食感が人気です。

心太の歴史は古く、八世紀初めに制定された大宝律令で租税の対象とされていたことか

ら、日本では奈良時代から、食用や和歌の素材としても愛されてきました。この句の中でも、「とつろてんを」「心太」と書いていますが「心天（こころてん）」が変化し、やがて「とつろてん」と呼ばれるようになったといえます。

この句の面白さは「つるつる」という擬音・擬態語を使っているところです。俳句ではオノマトペといい、心太の滑らかな質感がよく伝わります。このつるつるという音のリズムは、読んでいるだけで涼しげな気分になります。

桂一賞

夏休みじいじといっしょにつるをおる

玖珠町立塚脇小学校 2年

小野田 怜花

この俳句は、怜花さんがおじいさんと一緒につるをおったことが、とても温かな心で詠まれていて、読む人を羨ましくさせます。私にも孫がいますが、「じいじと一緒につるをおる」というような二人の時間が最も幸せです。この句は、怜花さんもおじいさんも一緒に幸せになつているという、もう一つの喜びがあります。

この句の季語は「夏休み」ですが、「夏休み」の言葉には、単なる休み以上の「特別な時間」「家族との交流」「冒険」というニュアンスが含まれています。特に「じいじ」が登場することで、日頃は感じにくい三世代の生活が映し出されていて、怜花さんの世代を超えた豊かな時間が流れていることが伝わります。

またここでの夏休みにつるを折るということから、日本人が持っている平和への祈りも伝わってきます。夏休みの八月という時期、

そして「つるをおる」という行動から、私たちは広島や長崎の原爆の日、あるいは終戦の日へと思い寄せていきます。そして、怜花さんが平和への願いを込めて折っているということが、「じいじといっしょに」という言葉でこの句を読む人に伝わり、共感を誘います。またここでの「じいじといっしょに」という言葉は、この句の核心になっているのですが、怜花さんが一人で折るのではなく、大好きな「じいじ」と一緒に同じ時間を共有してつるを折っている喜びが、世界中の人々の平和への願いに結びついているのです。俳句はわずかに十七音ですが、こんなにも豊かなことを表現できるのです。

大分県知事賞（小学生の部）

雪女みかんを一緒にどうですか

葛飾区立葉原小学校 6年

山田朝子

この俳句は、一般的には恐ろしいと言われる雪女に、朝子さんが「みかんを一緒にどうですか」と誘いかけるとも微笑ましい作品です。これまでの雪女を主題にした俳句では見られない、朝子さん独特の雪女との親しい関わりが見られ、読者も朝子さんの呼びかけに答えたくなりそうで、読む人はそこに惹きつけられます。この句の中心になっている雪女について詳しく見ていくと、この雪女とは、もともとは雪の妖怪と言われ「雪娘」とか「雪女郎」とも呼ばれている女性の姿をした妖怪で、雪の精とも言われています。一方、昔話や伝説の中の雪女は雪の精で、雪の中で行き倒れになった女の人の霊と言われ、吹雪の夜に雪女を親切にもてなしたとこ

ろ、翌朝雪女は黄金になってお礼に来たというような、とてもいい女の人という話も伝わっています。

私も朝子さんの俳句を読んで、この俳句での雪女は、この昔話に出てくるような素敵な女の人かも知れないと思いました。そのような明い雪女のイメージは、「みかんを一緒にどうですか」という呼びかけに、冬の団らんを象徴し、温かい人間関係を表す働きがあります。本来は「凍りつくような」イメージの雪女に対し、温もりを感じさせる「みかん」を差し出すことで、これまでに見たことのないような温かい俳句になったのだと思います。そしてそれは、そのまま朝子さんの人としての温かさにも表れています。この句にはそのような深い内容が込められていて、とても惹きつけられます。

大分県知事賞（中学生の部）

サイパンの戦争跡と夏の空

宇都宮短期大学附属中学校 1年

加藤広隆

この俳句は、「過去にあった戦争の悲劇」と「変わらないサイパンの夏の空」の自然が、何の意見も主張もなく対比されています。その対比が、具体的には書かれていない戦争への強いメッセージを発しているのです。

この句の季語は「夏の空」です。サイパンの夏の空は、吸い込まれるような澄んだ青さ、力強く盛り上がる入道雲、そしてきらきらと降り注ぐ太陽の光をイメージさせます。この圧倒的なサイパンの輝きが、戦争の歴史の爪痕を一層際立たせ、読む人の胸に迫ってきます。

この句の中七の戦争跡から、錆びた戦車や朽ちた砲台、あるいは慰霊碑が浮かび上がってきます。そしてそこにはかつてサイパンで起きた激しい戦闘と、失われていった多くの人の命の記憶が残されています。また下五の夏の空には、戦争があったことなど無関係であるかのように広がる「現在」のサイパンの大きな自然が広がっています。この戦争跡と夏の空を並べること、「こんなに美しい空の下で、あんなに悲惨な戦争があったのか」と言葉にならない憤りや戦争で亡くなった人たちへの哀悼の思いが、読者の心に広がります。

この句は、戦争の悲惨な姿を説明するのではなく、ただ「戦争跡」と「夏の空」を「と」の一字で並列させています。だからここでは、「戦争跡に夏の空」ではなく、「と」を使うことで、両者が同じ時間軸に存在している事実を突きつけ、読者とその間の「空白」を考えさせているのです。

大分県知事賞（高校生の部）

鉛筆の鋭き影や冬夕焼

鷺谷高等学校 2年

藤田有祐美

この俳句は、静かな部屋の中の「鉛筆の鋭き影」という極めて小さな視点と、「冬夕焼」という窓の外に広がる大きな視点を「や」の切れ字で一度切って、それをまた繋ぐ切れがこの句の大きな魅力になっています。またもう一つの魅力は、「鉛筆の鋭き影」という視覚的な鋭さと「冬夕焼」との色の対比にあります。机の上に置かれた鉛筆の先がピンと尖り、冬の夕焼けに鋭い影が伸びています。ここでいう「鋭さ」は、単に物理的に尖って鋭

いというだけでなく、冬の刺すような冷たさや有祐美さんの心の緊張を暗示しています。そのような二重の意味が「鉛筆の鋭き影や」というフレーズに表現されているのです。

この句の季語は「冬夕焼」です。夏の夕焼けが情熱的で力強いのに対し、冬の夕焼けは、冷たく澄んだ空気の中で、短い時間に鮮やかな赤を見せ、すぐに闇に飲み込まれていく厳しい美しさを持っています。

その冬の夕焼けが窓の外を焦がすような冷気に広がって、部屋の中の鉛筆の「影」をより濃く際立たせています。有祐美さんは、この冬の冷たく澄んだ空気の中で、緊張した自分の気持ちと向き合っているのです。

また一方で、中七の「鋭き影や」の「や」の切れ字が強く働いています。つまり、「鋭き影や」の「や」で一度作者の視線を「鉛筆の鋭き影」に止め、鉛筆の影の鋭さを強調しています。そしてその後の「冬夕焼」という大きな景をズームアップして、より一層美しく見せてくれています。

極寒の夕暮れ時、一人で机に向かう有祐美さんの孤独な時間が、鉛筆一本の「影」に凝縮されて、有祐美さんの心情がとても印象深く表現されています。

大分県教育長賞(小学生の部) 会場が沖なわになる運動会

大分市立大在小学校 4年 満辺 よつ葉

この俳句は、運動会の盛り上がりや熱気、そしてそこに漂う独特の空気感を「会場が沖なわになる」という言葉で表現した熱気のあふれる一句になっています。この句の最大の魅力は、「沖なわ」という言葉を地名としてだけでなく、「会場が沖なわになる」という「状態」を表す言葉として使っているところです。

ここでの様子は、運動会の出し物として伝統芸能である沖繩の「エイサー」を踊り、その迫力で会場が沖繩一色になっているのです。エイサーの太鼓の音、指笛、陽気で力強い応援、それらが運動会の会場を包み込み、そこが大分県であっても、まるで沖繩でお祭りをしていくような「沖繩の空気」に塗り替えられ、学校全体が沖繩になりきっているのです。この句は、難しい言葉は使わずに「会場が沖なわになる」とそのものズバリの表現で「エイサー」を踊り、会場が一体となっている瞬間を生き生きと私たちに伝えてくれています。

俳句では「運動会」は秋の季語ですので、ここでの運動会は秋季大運動会と思われると思います。秋の高く澄んだ空の下、一生懸命に踊ったり走ったりするよつ葉さんたちの姿と、運動会の熱気が読者に涼しい秋風を追い越して熱くて燃える沖繩をいっばいと感じさせてくれます。

大分県教育長賞(中学生の部) 終戦日「忘れるな」と鳴る鐘の音

筑紫野市立筑山中学校 2年 松岡 瑞葉

この俳句は、過去の戦争の悲劇を風化させまいとする瑞葉さんの強い意志と、静寂の中に響き渡る音を鋭く捉えた極めてメッセージ性の高い一句です。

この句の季語は「終戦日(八月十五日)」です。歳時記によるとこの日は、日本中が平和について考え、祈りを捧げる特別な日です。夏の盛りの暑さとともに、どこか張り詰めた厳かな空気が流れる一日であることを、終戦日という言葉は私たちに教えてくれます。

この句の核心は、鐘の音を「終戦日を忘れるな」という言葉として聴き取った瑞葉さんの耳にあります。実際には「ゴーン」という物理的な音なのかもしれませんが、瑞葉さんの心には、それが戦争の辛い歴史を語り継ぐうとする叫びや、戦争で亡くなった人々から、今を生きている人々へ「戦争を忘れるな」という警告のように聞こえたのです。この俳句では、あまり使われることのないカガッコで「忘れるな」と強調したことで、ただの言葉を超え、読者の胸に突き刺さるような力強さが生まれています。

この句では下五を「鐘の音」で締め括っています。そのことよって読者の耳には鐘の音が余韻としていつまでも残り続けます。鐘が鳴り終わった後の、しんと静まり返った終戦日の空気が、読む人の全身を包んで放さないのです。このようにこの俳句は、感覚の中でも特に聴覚的な力が強く働いて読者の心に強く残ります。

大分県教育長賞（高校生部の部）

立秋の斜陽が照らすレモンティー

大分県立玖珠美山高等学校 2年 清水翔太郎

この俳句は、夏から秋へと季節が移り変わる瞬間の西日の一瞬のきらめきと、光の耀きを鮮やかに切り取った都会的な情景が目につかぶとても美しい作品です。

季語は「立秋」です。立秋は暦の上では秋ですが、実際にはまだまだ猛暑が続きます。立秋になると真夏のキラキラした太陽とは違い、ふとした瞬間に光の色が変わったと感じることがあります。この句は、そのわずかな変化を敏感に捉えています。まだ夏の暑さが残る夕暮れ時の斜陽が、グラスのレモンティーを照らし、郷愁を誘っているのです。この句の素晴らしさは、光を見事に描き分ける印象派の画家のような視覚的な効果が活かされていることです。

ここでの斜陽とは西日のことですが、「立秋」という言葉と組み合わせられることで、真夏よりも少しだけ角度が低く、オレンジ色を帯びた切なさを感じさせます。またレモンティーは琥珀色の液体で、そこに浮くレモンは透けて黄色い光を通します。その斜めの光がグラスに黄色い影を作ります。その透明感を言葉だけでありありと目に浮かばせています。

この句を詠んだ翔太郎さんは、放課後や塾の帰り、あるいは家での一時にふと自分の手元にあるレモンティーが、今までと違う「秋の光」を浴びて輝いていることに気づいたのではないのでしょうか。大人が見落としてしまうような「日常の中のレモンティー」を素直な言葉で定着させて魅力的な一句にしています。

玖珠町長賞（小学生部の部）

カマキリになまえをつけてかわいがる

玖珠町立八幡小学校 2年 山下鼓登

この俳句は、「自然界の冷酷なハンター」であるカマキリと、鼓登さんの「純粹なカマキリへの愛情」とのギャップが微笑ましくも、どこかに読者をハッとさせるような魅力を持っています。

歳時記では「カマキリ」は秋の季語になっています。通常「カマキリ」は、「鋭い鎌」「威嚇する姿」「共食い」といった、厳しく攻撃的なイメージで俳句に詠まれることが多いのですが、鼓登さんは、そのカマキリに「なまえ」をつけてペットのように「かわいがる」と表現しています。「カマキリになまえをつけてかわいがる」ことは、普通の大人には見られない、小さな生命に対する真っ直ぐで純粹な視点です。それが詩情を醸し出し、読む人を惹きつけているのです。小動物も名前を付ける、その瞬間から虫ではなく特別な存在になります。カマキリは見た目からも可愛い姿はしていませんが、鼓登さんにとってはそれが特別の存在ですから、食べ物あげたり観察したり遊んだりして、仲良く交流していることが分かります。

この句はこれまで紹介してきた俳句のように直接戦争や平和に関わる言葉は出てきませんが、生きとし生けるものへの無上の愛情が示されており、「無垢な平和を愛する姿」がこの短い言葉の中に凝縮されていて、私たちに本当の平和とは何かと言うことを深く問いかけてくれます。

玖珠町長賞（中学生部の部）

沖へ出て動かぬ漁船 鰯雲

大分市立大分西中学校 3年 篠原康希

この俳句は、秋の広大な空とその下で動かない漁船の姿を美しく描いています。

この句の季語は「鰯雲」です。「鰯雲」は、空高く広がるうろこ雲やひつじ雲を指します。鰯の群れのように見えることから、「鰯雲」という名が付きました。秋の空いっぱい魚の鱗や鰯の群れのように小さな雲が並ぶ風景です。

この句に鰯雲という季語があることで、読者の視線は一気に空の高さと奥行きへと誘われます。そしてこの鰯雲は、秋の訪れと空気が澄んでいることを表し、この景色が一層際立つて秋の高く澄み渡った空と、静かな海の対比を魅力的に美しく見せてくれるのです。

詳しく見ていくと、船が波を立てて沖の方まで出て行ったとき、ぴたりと動かなくなつた漁船がいたりします。漁場に着いて漁をしているのか、遠すぎるのか、止まって動かぬように見えます。空を見上げると、そこにも鰯の群れのような雲が静かに浮かんでいきます。この句には、「海の上の漁船」と「空の上の鰯雲」が、同じ場面で静止していますが、互いに呼応し合っているような不思議な一体感があります。

この青い海と白い雲、そして漁船。海と空の圧倒的な広がりの中で、人間の営みである漁船が静かに、しかし確かな存在感を持って描かれています。景色は静かでありながら、どこか「自然の大きさ」と「人間の生活」が溶け合い、読者に深い余韻を残して心に染み渡ってくるようです。

玖珠町長賞（高校生の部）

豆の花天までのぼれジャックの木

大分県立玖珠美山高等学校 3年 井上遊太

この俳句は、目の前の豆の花という小さな自然に、イギリスの童話『ジャックと豆の木』の世界を重ね合わせた、とても夢のあるユニークでファンタジックな世界を描いています。

この句の季語は「豆の花」で、春の終わりの頃の晩春を表しています。エンドウ豆やソラマメなどの花は、蝶のような可愛い形をしていて、白や紫の美しい姿が特徴です。足元や畑に咲くこの小さな可愛らしい花が、この句の中心をなしています。

この句の素晴らしさは、目の前に咲いている豆の花という現実の世界から巨大なジャックの木という空想の世界へとダイナミックに飛躍する視線の動きにあります。

詳しく見ていくと、遊太さんが小さくて可愛い豆の花をかがんで見ていると、ジャックと豆の木の場面が目の前に浮かび、「天までのぼれ」という言葉が生まれてきました。遊太さんの視線は一気に地上から空高く、雲の上まで突き抜け「この豆の花が、ジャックと豆の木の話のようにどんどん伸びて、雲の上まで続いていったらいいな」という、遊太さんらしい自由な想像力が、五・七・五のリズムに乗って表現されています。この句は見たままを詠むこれまでの伝統的な表現にとどまらず、心の中のイメージや夢、少し不思議な感覚を言葉にする新しい俳句の表現を使って、俳句の世界を大きく広げています。そしてこのような夢のある表現も、俳句にはあることを私たちに教えてくれているのです。

玖珠町議会議長賞（小学生の部）

せん風きおぼけみたいなあいうえお

高岡市立伏木小学校 2年 舟本 匡吾

この俳句は、扇風機に向かって声を出す「誰もがやったことのある遊び」を「あいうえお」の音の感覚だけで見事に表現した、感性豊かな作品です。

この句の季語は「せん風き（扇風機）」で夏になります。その扇風機の回る羽根に向かって「あー」とか「いー」とか「うー」とか言って声に出すと、扇風機の回る風に声か震えて、宇宙人やおぼけのような不思議な響きになり、面白いので何度も何度も繰り返します。その時の声を匡吾さんは「おぼけみたいな」と表現し、さらに具体的な言葉ではなく、五十音の基本である「あいうえお」としたことで、声か震えて言葉にならない、あの独特の面白さを見つけたのです。

この俳句は五・七・五の定型になっていますので、声に出すととてもリズムが良く、何度も声に出して読みたくなります。「あいうえお」と扇風機の前で、何度も声を震わせて遊んでいる匡吾さんたちの弾むような息遣いが、そのまま俳句のリズムになっているような楽しさが伝わってきます。

またこの句は「風」以外の全ての音が「ひらがな」で書かれています。漢字が多くなる、漢字の意味が先に頭に入ってきますが、ひらがなが多いと扇風機の振動や、震える声の「音の感触」が直接読者の耳に伝わってきます。このことによって「あいうえお」の音が、この句の中では「オノマトペ」のように響き、とても親しみをもって読むことができます。

玖珠町議会議長賞（中学生の部）

茶を点てる祖母に教えを乞うた夏

古賀市立古賀東中学校 2年 早川 美結

この俳句は、伝統の継承と背筋が伸びるような静かな緊張感、そしてお祖母ちゃんへの敬意と尊敬が込められた非常に清らかな俳句です。

この句の季語は、文字通り「夏」です。茶道の世界では、夏には「洗い茶巾」などの涼しさを演出する独特の所作があります。戸外のうだるような暑さと、茶室の中の凜とした涼しさ、そしてお湯の沸く「松風」の音。「夏」という一言の季語が、その対比を鮮やかに引き立ててくれています。ここでは、そのお茶を点てる仕事を単に「お祖母ちゃんに教わった」のではなく「教えを乞うた」と表現しています。ここには祖母を「優しいおばあちゃん」としてだけでなく、「茶道の師匠」として尊敬し、仰ぎ、謙虚に教えを乞う真剣な姿勢が表れており、この句に一層の深みを与えています。この句は、伝統の重みをお祖母ちゃんから孫へ伝えていくのです。茶碗の回し方、茶杓の扱いなど、一つ一つの動作に込められた伝統の重みと心を、一滴も漏らさずに受け継ごうとする美結さんの真剣な時間が流れています。この句に直接的な音の描写はありませんが、読む者の耳には、茶筌が茶碗を打つ「シヤカシヤカ」という規則正しい音が聞こえて、日本文化の美しさが見事に表現されています。この句にはお祖母ちゃんの厳格さと優しさが夏の光の中に溶け込んでとても惹きつけられます。

玖珠町議会議長賞（高校生部の部）
永き日のリュックのままの駅ピアノ

鷺谷高等学校 3年 杉山慶多

この俳句は、「列車での旅の途中の開放感」と「春の日のゆったりと流れる時間」を、一台の駅ピアノの存在にスポットライトを当ててその中に収めた、非常にドラマチックな現代的な俳句です。

この句の季語は「永き日」で、春になり日が長くなったことを喜んでいきます。この「永き日」というのは、ただ時間が長いというだけでなく、「どこか心がのんびりとするような、心地よい気だるさ」の気分を含んだ季語です。この言葉があることで、駅という慌ただしいはずの場所が、魔法にかかったように穏やかな楽しい空間に変わります。

この句では、「リュックのまま」という慶多さんの一瞬の姿の描写が、鮮やかに切りとられており重要なポイントになっています。リュックを下ろす時間すら惜しんでピアノに向かった慶多さんの旅の臨場感が、「背負ったまま」という姿から、旅の真つ最中である躍動感が伝わります。そして背中中のリュックの「重み」と、ピアノから流れる音色の「軽やかさ」の対比が、春の光の中で美しく調和しています。駅ピアノは誰もが弾くことができ、誰もが聴くことができる偶然の出会いの象徴です。見知らぬ街の見知らぬ駅。春の長い日差しが差し込む中で、リュックを背負った一人の旅人がピアノを弾いています。その音色が駅全体を包み込み、通り過ぎる人々に「春」を届けています。この句からはそんな映画の一コマのような素敵な情景が浮かび上がってきます。

玖珠町教育長賞（小学生部の部）
敗戦忌せみのぬけがら手にのせる

大分市立天在小学校 6年 志村優衣

この俳句は、「蟬の死や過去の戦争の記憶」と「命の行き着く先のせみのぬけがら」を、手のひらで向き合わせている、深く静かな平和への祈りを込めた俳句です。

この句には、季語になる言葉が「敗戦忌」と「せみのぬけがら」の二つが合わされています。敗戦忌は、「八月十五日」で、日本が第二次世界大戦を終える重い歴史を背負った一日です。せみのぬけがらは、空蟬とも言い、蟬の命がそこから飛び去った後の「抜け殻」のことで、夏の終わりを感ぜさせるとともに、かつてそこに生きた蟬がいた「生の証」でもあります。

この句は「敗戦忌」という大きな歴史の出来事と「せみのぬけがら」という小さな自然の忘れ物を遠くから眺めるのではなく、自分の「手」にのせて見ているのです。この手にのせるということが、この俳句の最も魅力的なところだと思います。軽はずの抜け殻が、敗戦の日という文脈の中で、まるで失われた多くの命の形見のように重みを持って感じられます。壊れやすい抜け殻をそっと手にのせる優しさは、そのまま「平和を慈しむ心」「戦争を許さない心」にも繋がっています。六年生の優衣さんが、テレビや街の空気から「今日は戦没者を悼む終戦日だ」「第二次世界大戦で日本が敗戦した日だ」ということをしっかりと感じ取り、ふと見つけた蟬の抜け殻にその思いを重ねて見る純粹な感性が、世の大人に対しても理屈を超えた「平和を祈る」願いとして説得力を生み出しています。

玖珠町教育長賞（中学生部の部）
筆箱の中身パンパン夏休み

川辺町立川辺中学校 1年 加藤龍之介

この俳句は、宿題や期待あるいは解放感といった「夏休みの全エネルギー」を、筆箱という小さな箱に詰め込んだ、非常にエネルギーギッシュで生き生きとした俳句です。

この句の季語は「夏休み」で、もちろん夏です。そしてその主役は、何といても夏休みと関わった「パンパン」というオノマトペ（擬音・擬態語）です。筆箱自体は動かないものですが、その中身が「パンパン」であることで、これから始っていく夏休みで楽しんでいる遊びも、期待に胸を膨らませている課題活動も含めた圧倒的な活動量を予感させます。

一学期の学習が終わって、持ち帰った重たい筆箱。それを机に置いた瞬間の「さあ、夏休みだ」という張り切った気持ち、この「パンパン」という言葉から伝わってきます。たくさんの鉛筆、新しい消しゴム、定規、コンパス。宿題を片付けようという意気込み、あるいは塾や夏期講習への準備などが、次々浮かび上がってきます。そして「これから夏休みが始まるぞ」という、はち切れんばかりの喜びや、やりたいことが多すぎて整理がつかないワクワク感などが、ジッパーが閉まらないほど膨らんだ筆箱の姿に象徴されています。

この句では「パンパン」という日常の話し言葉をそのまま使ったことで、飾らないありのままの生活感が生まれています。この俳句の十七音の響きの中に、今この瞬間が最高に

詰まっていることを教えられ、読者も一緒に夏休みを迎えるような喜びが湧いてきます。

玖珠町教育長賞（高校生の部） 山笑う紙飛行機の始発便

山口県立下松工業高等学校 3年 島村佳希

この俳句は、春の訪れの喜びと新しいことが始まる瑞々しい冒険心のワクワク感が重なり合った、非常に爽やかでスケールの大きな作品です。

この句の季語は「山笑う」で春になります。「山笑う」とは、草木が芽吹き花が咲き、鳥が歌う山の様子を擬人化した言葉です。冬の「山眠る」から解き放たれ、山全体が笑っているような明るい生命感を表しています。

ここに出てくる紙飛行機は誰でも作れますが、上手く風に乗らなければ飛ばない繊細なものです。それが笑う山から吹き降ろす春風に乗って、高く遠くへ飛んでいくのです。始発便は本来、電車や飛行機の「その日の一番列車・一番機」を指しますが、ここでは春の訪れとともに、自分の夢や希望を乗せて春一番に飛ぶ飛行機を意味していると思われま

す。手元の小さな紙飛行機から、視線は一気に「笑う山」の大きな景観へと、そして空へと広がっていきます。「始発便」の言葉が持つ「これから何かが始まる」という清々しい決意が、春の光の中に満ち溢れ、その様子が目に浮かぶようです。

眠っていた山が「笑い」だす春の朝、その山に向かって放たれる最初の紙飛行機、そこには佳希さんの躍動感が込められています。

佳希さんは伝統的な山笑うの季語を使いながらも、そこに「紙飛行機」や「始発便」といった少し都会的あるいは現代的な言葉をミックスさせて、若者の現代感覚をだしています。

大分県俳句連盟会長賞（小学生の部） ほかほかの焼き芋食べてはひふへほ

友愛インターナショナルイスマックススクール 6年
アナスアルマウドウデイ

この俳句は、「冬の温もり」と「焼き芋のおいしさからこぼれる声」を「はひふへほ」の五十音のリズムだけで表現した最高に幸せで可愛らしい俳句です。

この句の季語は「焼き芋」で、ほかほかのという言葉がぴったりの冬になります。「焼き芋」を口にした時の、あのあつたかな感覚。熱くて「はふはふ」と言いながら、甘さと温かさが口いっぱい広がる様子を、アナスアルマウドウデイさんは、「はひふへほ」というハ行の音だけで完璧に捉えました。

「は」は、はっはっはと熱いことを表し、「ひ」は、ひほひほとほくほくする感じを表し、「ふ」は、ふーふーと芋を吹きながら冷ましている様子を表し、「へ」は、へへっとおいしく顔がほころぶ様子を浮かび上がらせ、「ほ」は、ほっとする温かさを伝えるような言葉にならない「音」の中に、焼き芋を食べている時の五感の全ての感じ方が詰まっているようです。

前に取り上げた句の「せん風きおぼけみたいなあいうえお」は「扇風機に響く風の音」の面白さでしたが、この俳句は、焼き芋の「熱さとおいしさ」を表しています。どちらの俳

句も作者が自分の体で感じた真実を「音」に託した名句です。この「焼き芋」の句は、冬の寒さの中で手から伝わる熱と立ち上る湯気。「ほかほか」した情景が、末尾の「はひふへほ」という明るい音色と相まって、読む人の心まで温めてくれます。

大分県俳句連盟会長賞（中学生の部） 強力なスマッシュ一本風薫る

古賀市立古賀東中学校 2年 岩継丈育

この俳句は、スポーツの素晴らしい躍動感と初夏の風薫る爽やかさが絶妙にミックスされた、非常にエネルギー的な作品です。

この句の季語は「風薫る」で、季節は初夏になります。夏の初めに青葉を吹き抜けてくる風が、まるで香るように爽やかに感じられる様子を表しています。この「爽やかさ」が、スポーツをして流す汗や熱気と組み合わせることで、非常に活動的で爽やかな印象を読者に与えてくれます。

「強力なスマッシュ一本」とは、テニスやバドミントン、あるいは卓球などの球技を連想させます。「強力」「一本」という言葉からスマッシュを打っている力強さ、ボールのスピード、そしてその一撃で勝負が決まったような「決まり手の鮮やかさ」までもが、生き生きと伝わってきます。そしてその激しい動きの後に、そのスマッシュを包み込むように爽やかな風が吹き抜けていく、静かで美しい自然の情景が浮かび上がります。この「激しいスマッシュの一撃」と「爽やかな風」の絶妙なコントラストが、読者にスポーツの心地よい余韻を残してくれます。

コート上で放たれた渾身のスマッシュ。その鋭い軌道が空気を切り裂き、決まった瞬間にふと我に返ると、初夏の心地よい風が吹き抜けていった。この俳句は、現代的な感性で日常の輝きを切り取った「スポーツ俳句」の名句といえることができると思います。

大分県俳句連盟会長賞(高校生の部)
アテンション・ゴー八月の水重く

中央大学杉並高等学校 1年 水上 颯

この俳句は、アテンション・ゴーという言葉からボート競技のスタートの瞬間を、ぎりぎりの緊張感と「八月の水重く」という季節の重厚感で切り取った、非常に現代的でフレッシュな鋭い作品です。前に出てきた「強力なスマッシュ一本風薫る」の句が「爽快感」だったのに対し、この句は「プレッシャー」や「身体感覚」に深く踏み込んでいるのが特徴です。

この句の季語は「八月」で晩夏になります。ここでは単に夏とするよりも八月とすることで、八月特有の逃げ場のない暑さ、湿り気、そして競技会などの重苦しさが強調されています。颯さんの所属する学校にはボート部があるそうですから、インターハイや選手権などもあり、競技者にとつての「正念場」というニュアンスも、この「八月」の季語には含まれている感じがします。

ここでの言葉の問題として、アテンション・ゴー (Attention, Go) がありますが、日本語で「よい、ドン」と言うよりも競技に即した言葉で、国際的な緊張感も漂います。この言葉を句の頭に置くことで、読者は一瞬で静

まり返ったスタートの空気の中に引き込まれます。「アテンション・ゴー」の合図とともに、真夏の熱気と重圧を含んだ逃げられない「八月の水」が待っているのです。水はまるで壁のように、あるいは鉛のように重く感じられます。この句は、その一瞬の爆発力とその裏にある孤独な闘いが「八月の水重く」でとてもよく伝わってきます。

大分県小学校長会長賞
秋高し相手の玉はよく入る

大分市立天在小学校 4年 梅本 唯

この俳句は、秋の澄み渡った高い空の下で、スポーツや遊びに興じている晴れやかな情景を詠んだものです。

ここでの季語は「秋高し」で秋です。空が澄み渡り、気分が晴れるような爽やかな秋晴を言います。その中で「相手の玉はよく入る」わけですから、スポーツ(玉入れやサッカーなど)を楽しみながらも、相手の玉だけがよく入るのを苦笑いしているようなユーモアがあります。前に紹介した「強力なスマッシュ一本風薫る」と「アテンション・ゴー八月の水重く」が「躍動感」や「緊張感」を捉えていたのに対し、この句は「客観的な視点」と「秋ののどかさ」が際立っています。

「秋高し」で空が澄み渡り、天が高く感じられる秋の最も気持ちの良い快晴です。この「突き抜けるような青空」が、唯さんの負けている気持ちと面白い対比を生んでいます。相手の玉がよく入るのは、自分がミスをしているのか、あるいは接戦なのか分かりませんが、とにかく「相手の玉が吸い込まれるよう

に目標に入って決まる」様子を表現しています。「なんであんなに入るんだ」と、少し悔しい気持ちがありますが、空が晴れ渡っているのでドロドロした悔しさではなく、「参ったな、相手が絶好調だ」と潔く認めているような雰囲気があります。この句は、非常に素直で飾らない「よく入る」という日常語を使っているため、読者は「自分にもあるある」と共感しやすくなっていて、好感をもって読むことができます。

大分県中学校長会長賞
母にまた嘘ばれてゐる曼珠沙華

鷺谷中学校 2年 岡部 莉央

この句は、これまでのスポーツの句とは打って変わり、日常の心理的な揺らぎと、秋の不気味なほどの鮮やかさが重なり合った、物語性の強い俳句で、作者の心のうろたえと、曼珠沙華の赤い色が強烈にリンクしています。

この句の季語は「曼珠沙華」で、秋の季語です。「曼珠沙華」は別名「彼岸花」「死人花」とも呼ばれており、葉がなく茎の先に突然鮮やかな赤い花を咲かせる独特の姿をしています。その妖艶で、どこか不吉さや死の香りを感じさせる花の特徴が、この句の「嘘」という言葉と深く呼応しています。母にまた嘘がばれていることについては、「また」という言葉から、これが初めての嘘ではないことがわかります。母という自分のすべてを見透かしている存在に対して、隠し事を隠し通せなかつた気まずさや体裁の悪さが言葉の裏に描かれています。そして嘘がばれた瞬間の動揺

の中で、ふと莉央さんの視界に入ってきたのが、地面から燃えるように噴き出して咲く曼珠沙華でした。母にはどうして隠し事ができないのだろうとろうたえてしまいます。ついた嘘を指摘され、立ちすくむ足元には、真つ赤に燃える曼珠沙華がこれでもかこれでもかと言うくらいに真つ赤に咲き誇っています。

大分県立学校長協会賞 春の雨古書のおいを呼び覚ます

神戸市立須磨翔風高等学校 1年 幸山啓人

この俳句は、五感を優しく刺激する非常に情緒豊かで静ひつな作品です。これまでの「躍動感」や「心の揺れ」を詠んだ句とは異なり、「静かな時間」と「記憶」に焦点を合わせて古書を匂い立たせているのが特徴です。

この句の季語は「春の雨」です。夏の夕立や秋の冷たい雨とは違い、春の雨はしとしとと柔らかく万物を潤し、眠っていた生命を呼び起こすような温かみを持っています。この句では、その「潤い」が植物ではなく、「本」という無機質なものに命を吹き込む仕組みとして働いています。ここでは湿り気を帯びた空気が、古びた紙やインクの匂いを濃く立ちのぼらせる様子を「呼び覚ます」と擬人化して嗅覚を強調しています。

「古書のおい」とは、単なる紙の匂いだけでなく、その本がこれまでに経てきた年

月や、かつてその本を読んだ人の記憶そのものなのです。雨が降ることで古書の中に閉じ込められていた古い時間が、現代に溶け出してくるような感覚を与えます。外はしとしとと降る春の雨。部屋の中で古本を開くと、湿った空気と共に懐かしいような、少し埃っぽいような古書の匂いがふわりと広がり、まるで雨が本のページの中に眠っていた古い物語や記憶を優しく起こすかのような感じがします。この句には自分一人だけの豊かな時間が流れています。喧騒から離れ、五感を研ぎ澄ませて微かな匂いや音を楽しんでいる深い精神性が感じられ、読んでいるだけで心が落ち着くような感覚になります。

読売新聞社賞

天の川星のまんいん電車くる

竹田市立祖峰小学校 3年 阿南俊助

この作品は、壮大な宇宙の情景と私たちの通勤や通学などの身近な生活を、ユーモアたっぷりに天の川や銀河鉄道に結びつけて、ファンタジックな世界を創り上げています。この句を読むと、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を思い出し、現代的な童話的な世界に読む人を馴染ませてくれます。

この句の季語は「天の川」で秋になります。夜空を横切る無数の星の集まりであり、通常は「仰ぎ見るもの」「遠くから眺めるもの」として詠まれるのですが、この句ではそれを「電車の路線」に見立てているのが最大の特徴です。

「天の川」に対し「まんいん電車」という現実的な言葉を組み合わせていますので、輝

く星がギューギューに詰め込まれ、一粒一粒の星が家路を急ぐ乗客の魂のように見えています。

この句では「満員」を「まんいん」と平仮名で書くことで、絵本のような柔らかさや軽快なリズムが出てきます。ふと夜空を見上げると光り輝く天の川があり、それは瞬く星たちを詰め込んだ「満員電車」のように見えます。今も目の前に星の光をたっぷり乗せた電車がやってきています。日常のストレスの象徴である「満員電車」を、星空という壮大な宇宙に包み込むことで、「忙しい毎日でも実は宇宙の一部なんだ」という癒しを与えてくれるようになります。

この句を読んだ後、いつもの駅のホームで見る電車のライトが少しだけ「星の光」に見えてくる。そんな日常の景色を変えてくれる力をこの句は持っているように思います。

俳句の特性とその理解

第四十三回全国児童生徒俳句大会の入賞作品の選評を終えるにあたり、応募作品の全般的な特徴と一万句を越える作品を選句し、選評を書いていく中で気づいたことがいくつかありますので、それらのことを皆さんとともに考え、俳句を楽しく作ることの意味や自由に自分の思いを俳句に表現する方法について、考えていきたいと思います。

俳句を楽しく作るために

毎年多くの皆さんから、この俳句大会にたくさんの作品を寄せていただいております。

先生方や指導者の皆さんが、俳句を作ることを通して子どもたちと関わり、子どもたち一人一人の個性を認め、良さを引き出し、豊かな感性を育みながら表現力を伸ばすことにご尽力いただいていることに深く感謝しています。

そのような人々とともに、改めて私たちが作っている俳句について、「俳句とは何か」「自分の思いを俳句で表現するにはどうすればよいか」「俳句を深く味わうにはどうすればよいか」と言うことを、皆さんから寄せられた作品や先輩方の残された俳句などを参考にさせていただきながら、具体的に考えてみたいと思います。

最初に俳句を作るに当たって、皆さんと共通理解しておかなければならないことがあります。それは、俳句は長い歴史をもつ文学作品という特性から、算数や理科のように何か一つの正しい答えを出すことは難しいと言いうことです。なぜかといえば、一人一人に一つ一つの俳句に対する考え方や俳句観があって、それは少しずつみんな違っているからです。

俳句は自分の感動を表現する

「俳句とはこう言うものだからこのように作る」と言うような固定的な考え方をしたり、人に押しつけたりしないで、俳句に向かうことが大切になります。つまり、俳句を作るときには十七音で作ることを基本にしなから、見るもの聞くものなど、自分の感動したことを好きなように書き留めていき、それぞれの人の考え方も幅広く受け入れながら俳句

を作っていくことが大切になります。「上手であるとか、下手である」とか「俳句になっているとか、なっていない」とかはあまり気にしないで、まず気楽に自由に考えて俳句を作り始めることが大切です。つまり「今、自分がここにこのように生きている」ことを全身で感じ取ることが、俳句を作ることの出発点になるのです。そして自分が今、人間として何かを見て、何かに触れ、何かを聞き、何かを味わい、何かを感じながら生きていることをしっかりと受け止めるのです。そうするとそれぞれの人の中に自分の想いが湧いてくることに気付くことができます。その想いが、十七音の限られた言葉になって立ち上がってきます。疑いなく自分が一人の人間としてここに生きていくという証が、十七音の言葉として花開いてくるのです。百人百様それぞれの顔が違うように、同じものに接していても人の想いはそれぞれ百様の花になって開くのです。それをうまく言葉で表すこともできれば、うまくできないこともあります。でも心配しないで、それを今の自分の言葉で書き留めておくのです。上手に言えた時より上手に言えなかった時の方が、俳句としては心がこもり、読んでくれる人の心に素直に伝わることもよくあります。俳句は十七音しかなくて、言いたいことが思い切って言えないようなところがありますが、上手に言えなかった時の方が、かえって多くの想いや感動を人に伝えてくれることもあるのです。

例えば、二〇二三年に行われたワールド・ベースボール・クラシックス(WBC)の準々決勝で3ランホームランを打って日本を勝利に導いた岡本和真選手は、ヒーローイン

タビューで感想を聞かれ「最高です」と一言で答えました。その後いろいろな場面で何度も聞かれましたが、やはり「最高です」と一言で答えました。六回目に聞かれたときには、胸の想いを言葉にしようと思いをためて言葉を探していましたが、やはり「最高です」と一杯の真実を込めて一言で答えました。その時球場には最高の拍手が起り、その言葉を聞いた観客も最高の感動を受け止めることができました。上手に喋れないことや、多くを喋らないことがかえって大きな感動を呼ぶことを私たちに実感として教えてくれました。

俳句は一人称の文学

俳句でもう一つ大切なこととして「俳句は一人称の文学」と言われるように「自分の想いを書く」ことが基本にあります。自分の想いを正直に書こうとすれば、その想いをしっかりと見つめる必要があります。自分の想いをみつめることは、向き合っている対象をよく見つめることにもなります。それは今まで気づかなかった自分を発見することにもなるのです。これまでの作品はこのような中から生み出されていますので、一人一人の作品は「他人事ではなく」自分のために自分自身を書いていることにもなっています。

俳句は世界一短い詩である

現在では世界中の人たちが俳句を作るようになっていますが、そこで共通になるキーワードが「世界一短い詩」と言うことです。つまり「俳句は世界の最短詩」なのです。俳

句は「五七五」の音が基本になるので、世界で一番短い「十七音」の定型詩になります。簡単に言えば「十七音詩」で、本大会の初代選者であった角川春樹先生は、このような俳句の基本を踏まえて俳句を「魂の一行詩」と表現されています。この短さをこれまでで発表されてきた先人の作品の中で確認していくと、十七音には届かない

咳をしても一人

尾崎放哉

うごけば、寒い

橋本夢道

草も月夜

青木此君楼

まつすぐな道でさみしい

種田山頭火

という短いものから、十七音を超える

凡そ天下に去来程の小さき墓に参りけり

高浜虚子

たんぼぼたんぼ砂浜に春が目を開く

萩原井泉水

どつと笑ひしがわれには病める母ありけり

栗林一石路

のような長いものまであります。つまり俳句の長さは、分かりやすく言えば「一息で言えるくらい」の長さ」になります。高浜虚子はそのことを「俳句は胸にためているいろいろな想いをひと息にもらすようなもの」と言っています。

これまでの俳句大会の作品の中には、十七音より短いものや長いものもたくさんあります。

したが、入賞作品にはほとんどなく、基本的には十七音で表現した作品が中心でした。

俳句は十七音の定型詩

俳句は基本的に、五七五の十七音で構成されています。しかし中には全体は十七音ですが、七五五や五五七のように読み方がまたがる俳句もあります。十七音で構成されていても「句またがり」になり、リズムが五七五ではない俳句を「定型」の俳句に対して「破調」の俳句と呼ぶこともあります。さらに俳句の五七五音の定型音律から少しはみ出し、七七五や八七六になっていたり、五六五や五七四などのように字足らずになったり、「字余り」や「字足らず」の句もありますが、それらも一応定型の枠組みの中に入れて考えています。これら破調の俳句も多くの人に親しまれていますので、今回も入選の句に入っています。

俳句は詩である

俳句が「詩」であるということでは、「詩は心に感じたことを、一定のリズムと形式にあてはめて言葉で表したものだ」なので、日常で私たちが使う文章のような散文とは違います。俳句を含めた詩は、言葉の表面的な意味だけでなく、美しい言葉で呼びかけて、注意や自覚、良心などを表現する文学の一つの形式になっています。また一定のリズムを持つ韻文で、効果的に感動や叙情、心の動きなどを表すための表現上の工夫がなされているものなのです。簡単に言えば俳句は、感

動を表現する十七音定型詩なのです。したがって、これまでや今回の入賞・入選作品においても、基本的に「詩」から離れた散文的なものや説明的な傾向の強いものは入賞・入選作品から外しています。

俳句が「詩」であることの最も大切な条件は、その作者にしかない発見や驚き、悲しみや喜びなど深い「感動」があることです。読む人は、作った人の感動に共感することによって、自然や人間などについて深く考え味わうことができるのです。毎回作品を選句していく中で、日記に出てくるような説明的な作品も多くあります。それらは読む人には作者の言いたいことはよく分かるのですが、「ああそうですか」と受け取ってしまうだけで、作った人の感動が伝わってきません。俳句ではそのような俳句を「ああそうですか俳句」とか「ただ事俳句」などと言います。芭蕉もそのような説明的散文的な俳句に対して『去来抄』と言う書物の中で「いひおほせて何かある」つまり、「説明しつくしたとしてもそれはなんになる。それは俳句としての価値は認めることができない」と言って、説明的な表現を戒めています。ここで「いい過ぎ」や「説明しすぎ」「散文的になっていく」俳句について説明してくれている面白い事例がありましたので、紹介してみたいと思います。

ここで取り上げられているのは「コスモスや」の句で、「コスモスや風に揺れたるこころもち」というものでした。同じような句が本大会の作品にもたくさんあり、よく見かける説明的な句の特徴を表しています。この俳句をよく読んでみると、一見いい句のように見えるかもしれませんが、「風に揺れる」

とは「コスモス」と言う言葉の中にすでに含まれているイメージなのです。つまり「いわずもがな」のことなのです。コスモスと言えば「風に揺れる」「ピンク」「やさしい」「はかない」のような言葉は、誰もが普通に思い浮かべる一般的な言葉なのです。つまり「コスモス」に対して「風に揺れたる」はコスモスの一般的な説明をしているに過ぎないわけで、わざわざ短い十七音の中で言わなくてもいいことなのです。したがって、そのようなコスモスのもつイメージは、「コスモス」と言う言葉に任せてしまい、作者は深入りせず省略することが俳句を作るときには大切なのです。

このような例として昔から「板敷きに下女取り落としたる海鼠かな」と言う俳句が取り上げられてきました。最初の省略は「板敷きに落としたる海鼠かな」のように「下女」と言う言葉の省略です。それをもっと省略して「取り落とし取り落としたる海鼠かな」と「板敷きに」という言葉を省略するように推敲するのです。

現在では生活が複雑になり、見るもの聞くもの感じるものも複雑になっていく中で、言いたいこと訴えたいことが、十七音の枠を越えるのは当然の成り行きですが、俳句ではその言いたいことを省略して十七音で表現するのです。そういう意味で言えば「俳句はものを言わない」あるいは「ものが言えない」「省略」の文学と言うことができると思います。

季語について

俳句のもう一つの特性として季語があります。季語とは季節を表す言葉で、俳句では一句の中に季語を入れると言う約束事があります。

夏草や兵どもが夢の跡 松尾芭蕉

この句は有名な芭蕉の『奥の細道』の中に出てくる一句ですが、ここでは「夏草」が夏を表す季語になっています。この季語について、季語と季題を使い分けて使う人もいます。その場合の季語は、季節を表す言葉全般を指しているのに対して、季題は俳句を作る時の「席題」や「兼題」などの題にする季語のことを言い、季語よりも重要視しています。題詠などで季語を題にするときは、その季語のことを季題として季語という言葉とは使い分けているのです。しかしここでは一般的に使われてるように季題も季語も区別せず、一つにまとめて「季語」という言葉として使っていくようにしています。

俳句は十七音の短い表現になっていますので、感動を人に伝えるためにはどうしても一句の中に、普通の言葉とは次元の違う印象の強い言葉が求められます。俳句ではそのような働きをする言葉を季語として一句の中に取り入れて詩情を高めてきました。特別な場合は別として、季語が入っている「有季」が俳句を作る時の伝統的な約束になっています。この季語も時代の流れとともに変わってきていますので、季語に対する受け止め方も様々であって、考え方もいろいろあります。中には、

しんしんと肺碧きまで海のたび 篠原鳳作

湾曲し火傷し爆心地のマラソン 金子兜太

戦争が廊下の奥に立ってゐた 渡辺白泉

いつせいに柱の燃ゆる都かな 三橋敏雄

広島や卵食ふ時口ひらく 西東三鬼

木の股の猫のむこうの空気かな 橋 間石

号泣やたくさん息を吸ってから 池田澄子

のような季語のない無季の俳句を作る人もいますが、その場合でも一句の中には季語に代わる詩的な象徴的な言葉が「詩語」として位置づいています。

歳時記を開いてみますと、現代俳句協会が中心になって編纂した『現代俳句歳時記』に、季語のない無季の俳句を「雑」の部としてたくさん取り上げています。また『季題別飯田龍太全句集』では、季語のない俳句を「雑」として十九句別に取り上げている例もあります。同じようにこの大会の選者をしていただいていた有馬朗人先生も全句集の中に「雑」として無季の俳句を六句残しています。この無季については、季語を入れることに非常にこだわっていた水原秋桜子も、晩年にはいくつかの無季の俳句を発表していますし、無季は認めないと主張していましたが藤田湘子も死の直前の発表作品の中に「無季」という前書きのある「死ぬ朝は野にあかがねの鐘鳴らむ」と言う句を絶句として残しています。

季語のない俳句について東日本大震災の惨事を俳句雑誌で特集しているものを見たことがあります。その時季定型を基本とする

俳人が無季の俳句を発表していました。私は発表された俳句を見ながら、あのような惨事の中では、季語を越えた表現になることを改めて教えられ、ともに、無季の俳句も俳句として認められてもいいのだと思いました。

また、第四十二回の「ラムネ瓶しゅわっと夏が始まった(高田匠輔)」の講評の中でも説明しましたが、季語の重なる「季重なり」も俳句では問題になることがあります。「季重なり」とは一つの俳句に季語が二つ以上入っている俳句を言います。原則として一つの俳句に季語は一つで作ることが俳句を作るときに暗黙の約束になっています。ただ一句の中に仮に二つの季語が使われていたとしても、そのどちらかに明らかに焦点が絞られていけば、必ずしも俳句としてだめな作品と言うことはありません。しかし俳句の約束事に慣れるまでは、季重なりの句は良く気をつけて一つに絞る方が、俳句としての乱れは少なくなると言われています。この「季重なり」については、

秋風や桐に動きて鳶の霜

芭蕉

菜の花や月は東に日は西に

蕪村

鶯や卒然として霞める日

虚子

障子しめて四方の紅葉を感じをり

星野立子

蚊の去りしあとあかつきの青葉木菟

秋桜子

桜よりはじまつてる初紅葉

稲畑汀子

稲刈りの進めば進む蝗かな

鷹羽狩行

など芭蕉や蕪村、高浜虚子、水原秋桜子などの句や歳時記の中にも「季重なり」の俳句をたくさん見かけますので、季語が重なっている俳句もあることは知っておいてください。しかし十七音という短い一句の中で、季語のように中心になる強い言葉が二つ三つと重なると、俳句の中心が割れてしまい、まとまりがなくなり美的ではなくなることもありますので、中心を一つに絞ることが求められるのです。(これについても河東碧梧桐たちの無中心俳句という運動もありましたので一概には言えませんが……)

したがって「季重なり」になっても一つの季語が強くて主になり、もう一つの季語が副になって支えているような場合は俳句として立派に成り立ちますので、季重なりというだけでその一句を否定することはできません。また「季重なり」の俳句の例としてよく出てくる山口素堂の

目には青葉山ほととぎす初鰹

山口素堂

の有名な句などは三つも季語が重なっていますが、視覚としての「目には青葉」聴覚としての「山ほととぎす」味覚としての「初鰹」のように感覚で統一されていますので、「季重なり」が逆に有効に生かされています。

「切れ字」について

講評の中でも説明しましたが俳句では「切れ」が大切であり、「切れ」を作るために使われる「や」「かな」「けり」のことを「切れ字」と言います。「霜柱俳句は切れ字響きけり(石

田波郷)」のように、俳句ではこの切れ字が特に大切だと言われています。切れ字を使った俳句としては、

古池や蛙飛びこむ水の音

松尾芭蕉

月天心貧しき町を通りけり

与謝蕪村

などが特に有名で、教科書の中にも紹介されています。「切れ」があると俳句が引き締まり、余韻が出てきます。この「切れ」は俳句独特の特性ですので、きちんと理解しておく必要があります。この俳句における「切れ」を見ていくと、今回の作品の中には「や、かな、けり」などの切れ字を使っている俳句として、鉛筆の鋭き影や冬夕焼

藤田有祐美

があります。一方「や、かな、けり」というような切れ字は使っていないのですが、切れ字を使っている俳句として、

「夏休み」じいじといっしょにつるをおる

小野田怜花

「雪女」みかんを一緒にどうですか

山田朝子

「終戦日」「忘れるな」と鳴る鐘の音

松岡瑞葉

「豆の花」天までのほれジャックの木

井上遊太

などの作品があります。

俳句の「切れ」は文字通り内容を切り分けたり、余韻を持たせたりする働きがあります。俳句は最短短詩ですから、十七音を途中で切つて内容を分け、余韻を持たせることで詩的な世界に膨らみを生み出します。切れ字の役目は、その前の語句の意味を強調したり、俳句を詠むときにそこで一瞬息をついたりして、その語の持つ意味や印象をより鮮明に印象深くするなどの働きがあります。五七五を切れない言葉で表現してしまうと、一句がやや締まりのない感じになってしまうことがあります。「や」「かな」「けり」などの終助詞に限らず活用語の終止形や命令形など、また名詞なども一旦そこで切れる場合は広い意味では切れ字と言います。

冬の水一枝の影も欺かず

中村草田男

の句も「冬の水」で一旦切れていますので、それは切れ字と言うことができます。また十七音を途中で切ることによって、その直前の言葉を強調したり、アクセントをつけたり、感動したポイントを詠嘆したりして、読む人に分かりやすく伝えてくれます。読む人が「や」「かな」「けり」で詠嘆されると、俳句らしく感じるのもそのような働きがあるからです。

例えば「目の前に真つ赤な花が咲いている。空は雲一つなく晴れ渡っている。」と書かれると眼前に真つ赤な花が残されたまま雲一つなく晴れわたった空に映像が映っていき、直前の花の色が強調され險に残ります。この例文のような働きが俳句の「切れ」にはあるのです。

さらにもう一つ、一句の中の「切れ」は一つだけという暗黙の了解があります。一つの俳句に二つの切れが入ってしまうと、その俳句は「三段切れ」と呼ばれ、俳句における「切れ」の効果を失ってしまい、逆に一句がばらばらになり単語の羅列のようになってしまいます。もちろんこのことも俳句の決まりとして「絶対にダメだ」と言うことではありませんが、「切れ字」を使って俳句をぶつぶつ切ってしまうと美的な世界が壊されて粗雑になり、短い俳句がばらばらになってまとまりがなく味わいが浅くなるので、できるだけ避けるようにしています。しかし水原秋桜子は、最後の辞世の句として「紫陽花や水辺の夕餉早きかな」という「や」と「かな」の重なった句を作っていますし、中村草田男は「降る雪や明治は遠くなりけり」のように「や」と「けり」の重なった句を作っています。このように「切れ字」を二つ使っても、これが有効に働く場合は作品として立派に自立するのです。水原秋桜子の一門であった石田波郷の

機織や田は植ゑられて了ひけり

鮎打つや天城に近くなりけり

茶を買ふや麻布も暑くなりけり

のような「切れ字」が二つ重なった句があることはよく知られています。ここで俳句の切れの働きをまとめると、「余韻をもたせて表現を大きくする」「感動のポイントを分かり易くする」と言うことです。ちなみにこれまででの大会の選で「や、かな、けり」など

切れ字が二つ重なっている作品は見当たりませんでしたので、入選作品の中には入っていません。

俳句の構成について

五七五の十七音がどのような組み立てになっているか、つまり俳句の基本的な構成を考えることがとても重要になります。

俳句では、「五七五」の作品を一つのまとまりとして述べる方法を「一句一章の句」とか一物（いちぶつ）仕立ての句」とか言います。その例としては、

流れゆく大根の葉の早さかな 高浜虚子

飴して山ほととぎすほしいまま 杉田久女

滝落ちて群青世界とどろけり 水原秋桜子

一月の川一月の谷の中 飯田龍太

再軍備絶対反対胸まで焚火 柏原和男

野に來れば野にはとんぼの眼満つ 田原千暉

籬壇に置き忘れたる貝鉤 館山 實

草餅を焼く天平の色に焼く 有馬朗人

蛇下げて來し子に弥撒の座のくづれ

宮田カイ子

まっすぐに雪の束來る鯉の村 松田ひろむ

山一つ超せば余寒のピアノ鳴る 秋篠光広

雑煮食うも骨を拾うも箸の国 河野輝明

分校の児童の数のチューリップ 田島恵子

じゃんけんで負けた螢がついて来る

赤嶺友子

村中の夕日集めて稲を刈る

足立町子

などの俳句があります。今大会の作品では、

やぎさんにたべられちゃったママのふく

岩田光来

戦争は水鉄砲ですればいい

中村拓夢

つるつると箸から逃げる心太

河野とうこ

サイパンの戦争跡と夏の空

加藤広隆

立秋の斜陽が照らすレモンティー

清水翔太郎

などが一句一章の句となります。つまり「全体が季語に関係すること」でまとまっています。また、五七五が句の中で切れているのを「二句一章の句」とか「取り合わせの句」と言いますが、その例として、

春風や闘志いだきて丘に立つ 高浜虚子
芋の露連山影を正しうす 飯田蛇笏
女来と帯び纏き出づる百日紅 石田波郷
萱さむし日本国立療養所 田原千暉
夕焼けやパンとは立ちて食うものか 柏原和男

啄木忌春田へ灯す君らの寮

古沢太穂

白梅や仏を入れる、経の声

飴山 實

祇園会や千の乙女に千の櫛

有馬朗人

名月やはたくものを籠の中

秋篠光広

背にシャワーそこは昨日の羽根の後

伊藤利恵

一月や捨つべきものは早や捨てて

倉田絃文

吾亦紅揺れたいときに風が無い

足立 攝

秋の日や調律音はラのひびき

園田真理子

エプロンの袖口に風大根干す

大野洋子

などの俳句があります。今大会の作品では、

鉛筆の鋭き影や冬夕焼

藤田有祐美

沖へ出て動かぬ漁船雲

篠原康希

敗戦忌せみのぬげがら手にのせる志村優衣

秋高し相手の玉はよく入る

梅本 唯

母にまた嘘ばれてゐる曼珠沙華 岡部莉央

などが二句一章の作品となります。つまり『季語』+『季語に関係の無いこと』や『季語に関係の無いこと』+『季語』と言うことです。したがって俳句を鑑賞するにあたっては、私たちは知らず知らずのうちに胸に伝わってくる感動がどのような構造になっっているかを自然に感じているようです。俳句を作ったり推敲したりするときに、このことを頭に入れておくこと俳句の世界が広がってくると思えます。インターネットでも同じようなことがコスモスを例にして紹介されてきました。「コ

スモス」は四音なので、上の五音にするために何か一音足す必要があります。つまり「コスモスの」「コスモスを」「コスモスに」などと考えていくのですが、その中で一句一章になっっているものを少し紹介します。

コスモスはどこにありても風少し

細見綾子

コスモスもすがれる蝶も露しとど

水原秋桜子

またこのコスモスで、二句一章の句にするために「コスモス」に切れ字の「や」をつけて「コスモスや」としています。「や」は切れ字の働きをして強い詠嘆を表しますので、「美しいなあ。もうこんなにくさんコスモスが咲いているよ」とか「わあ、可愛らしい。こんな所にコスモスが咲いているよ」と言うような状況を表現してくれます。それらの作品には、

コスモスや二戸相倚れる柿葺

阿波野青畝

コスモスや倒れぬはなき花盛り

松本たかし

コスモスや光かがやく墓ばかり

村山故郷

コスモスや墓銘に彫りし愛の文字

富安風生

などがあり、インターネットでは、「コスモスやもうすぐ妻の誕生日」という句が紹介されています。

類句、類想句、模倣句について

今回の選句において入賞・入選の作品に採用しなかったものに、類句、類想句、模倣句という問題があります。「類句、類想句、模倣句」は、同じような発想で同じような俳句を作ることです。俳句は十七音しかない短い表現ですので、似たような俳句や全く同じ俳句が生まれやすい傾向があります。そのため様々な大会においても類句、類想句、模倣句を検証し、吟味して入賞を決めています。本大会の選句にあたっては、基本的には類句、類想句、模倣句は入賞・入選句から外していません。

類句、類想句、模倣句を調べるために、本大会の過去の作品を検証しました。また全国的な大会での入賞作品に対しては、連携している各種俳句大会の事務局に候補作品を送り、詳しく検証していただきました。そして類句・類想性や模倣性が強く感じられる作品については選から外しました。このような類想句や模倣句については、十七音と言う短さを特徴とする俳句の持つ宿命のようなもので、似たような俳句や全く同じ俳句が生まれるのは常と言っていいくらいです。そのため大きな俳句大会などにおいても、過去に他の大会で入賞した句が、別の俳句大会で受賞したりして問題になることもあります。そのような場合には「受賞を取り消す」ことになっているようです。

しかし俳句を作るときに類句、類想句を恐れて、俳句をのびのびと作ることが出来なくなってしまうと困りますので、「自分から進んで意識的に真似をする」ことは避けると

しても、結果として類句、類想句になることは、必要以上に気にしない方が良いと思います。芭蕉も「自分の句が他人の句に似てしまうより、実は自分が似たような句ばかり作っていることに気付かないものです。これを避けるには深く考えて、味わいながら句を作ることです。もし類句を作ってしまったら、迷わず自分の句を捨てなさい」と言っています。そして芭蕉自身も「須磨は暮れ明石の方はあかあかと日はつれなくも秋風ぞふく」という歌と関わって「あかあかと日はつれなくも秋の風 芭蕉」という俳句を作っています。また、別の例に

降る雪や明治は遠くなりけり 中村草田男
と言う句に先駆けて、

瀬祭忌明治は遠くなりけり 志賀芥子
と言う俳句がすでにあつたことなど、有名な話もあります。他にも「良寛と一茶」に、

焚くほどは風がもてくる落ち葉かな 良寛
焚くほどは風がくれたる落ち葉かな 一茶

「池西言水と山口誓子」に、
木枯らしの果はありけり海の音 池西言水
海に出て木枯らし帰るところなし 山口誓子

「川端茅舎と多賀よし子」に、

一枚の餅のごとくに雪残る 川端茅舎
一枚の餅の如くに乱れたく 多賀よし子

「森澄雄と鈴木真砂女」に、
猪藪（めなもみ）や旅につかれしふくらはぎ 森 澄雄

初蛙旅の疲れのふくらはぎ 鈴木真砂女

「森澄雄と日美清史」に、

かたかこの花や越後にひとり客 森 澄雄
かたくりの花や常陸にひとり客 日美清史

「池田澄子と權未知子、奥坂まや」に、

新鮮に死んでいるなり桜鯛 池田澄子

いきいきと死んでるなり水中花

權未知子

いきいきと死んでるなり兜虫 奥坂まや

などと上げていけば枚挙にいとまがありません。今回も既に他の大会で賞に入っている作品や俳句の書籍の中に掲載されている作品がありました。考え方によれば、その作品は誰が見ても優れていると言うことなのですが、本大会においては先に発表した作品を優先すると言うことで、すでに発表された作品がある場合は、入賞・入選作品から外すことにしました。他にも全く同じではありませんが、とてもよく似ている類句についても、先に

作った人の作品を優先すると言うことで、入賞・入選から外しています。

俳句における推敲について

俳句を作っていく時、もう一つ大切なことがあります。それは「推敲」です。推敲とは出来上がった俳句の質を高めるためにもう一度見直して、一句に表現した字句を吟味して練り直すことです。ここで特に大切になることは、最初に読み直すことです。俳句ですらで声に出して、できれば朗々と読み直すことがとても重要になります。芭蕉はそのことを、去来抄の中で「舌頭に千転せよ」と言って「何度も何度も舌の上に乗せて読み返すこと」を勧めています。俳句ではリズムや調べが特に大切ですので、読み返しているうちにより良いリズムのある表現を獲得できるのです。

またこの読み返しは、誤字脱字、言葉遣いの間違いを見つけることにもつながります。さらにこの読み返しの中で、同じ音の繰り返しや韻の踏み方、あるいはオノマトペの響きはどうかなどについても考えていくことができ、俳句としてより深い表現ができるようになります。

次にこの出来上がった俳句を客観的に読み直すことも必要になります。その時自分の表現しなかったことが素直に書けているかどうかや、人が読んで真意が伝わる表現になっているかを吟味していくことが必要になります。このためには、作った俳句を一日おいて推敲する人もいます。

一方季語や言葉、語彙のチェックをしていくことも完成した作品に仕上げるためには、

とても大切になります。季語の使い方は特に重要ですので、有効に働いているかどうかや、別の季語に置き換えをした方が良いかどうかなどを丁寧に見直しする必要があります。言葉や語彙については重複しているものはないか、言い間違いはないかなどについて辞典を活用しながら検討し、間違いがあれば訂正し、重複表現があれば削るようにし、同じような表現があれば吟味し省略するようにします。

次に言葉の語順は現状のままが良いかを考え、しっくりいかなければ語順の入れ替えを試みます。常套的な句や手垢の付いたような通俗的な語句がないかを見直し、あれば新鮮なその場に合った具体的な表現に変えていきます。加えて、漢字ひらがな・カタカナ・ローマ字・数字・外国語などの表記が効果的かどうかを検討し、適切な表現に直します。助詞の使い方も俳句では独特な使い方をすることもありますので、ここでの使い方が適切かどうかを検討し、その場面に合ったものに置き換えていくようにします。

最後にこの作品に「類句、類想句、模倣句」があるかどうかを検討する必要があります。もし意図的に真似た部分があれば、その作品を公表することは差し控えるようにして下さい。

俳句における分かり易さ

俳句はやはり文学・文芸ですから、人に伝えると言う大切な機能があります。このことから考えると「分かり易い」ことは、とても大切な要素ですが、分かり易いだけでは人を感動させるいい作品にはならないという問題

もあります。芭蕉以来、多くの先人の優れた作品を読んでみますと、確かに分かり易い俳句が多くありますが、理解することが難しい俳句も結構たくさんあります。読み手としては、分かり易い俳句に親しみを感ずりますが、だからと言って分かり易い俳句だけがいい俳句であると決めつけることは、少し早合点のような気がします。一見難しいと思われる俳句も、難しい言葉を辞書で引いて確かめたり、分からない所を人に聞いたりしながらゆっくりと丁寧に読んでいくと、その俳句の良さや魅力に出会うことができます。実はそこに俳句のもう一つの価値があるのです。そのように考えると俳句は自分の作品を作ること、人の作品を鑑賞することを同時に行うことがとても大切になるのです。芭蕉は「自分は句を作ることは一番ではないかも知れないが、俳句をさばく（選句をして鑑賞する）ことでは人に負けない」と言っています。皆さんもこのように自分で俳句を作るとともに、この機会に是非、多くの人の作品を読んで味わう楽しさを学んでもらいたいと思います。

俳句は昔から「衆の文学」と言われるように、仲間の作った作品を読み合ってその作品の分からないことや良いと思ったことなどを仲間同士で話し合っって意見を交換することも伝統的に大切にしてきました。そのようなコミニケーションが俳句の中ではとても大切なのです。

俳句の言葉を増やすために

私はこの大会が始まった頃から二十年近く、地域の公民館の子ども俳句教室で、小学

生と一緒に俳句を作っていました。その教室には、この大会の選者で私の俳句の先生であった有馬朗人先生も大分に何回か来て、直接子ども俳句の指導をして頂いたこともありました。その時小学三年生の女の子が有馬先生に「よい俳句を作れるようになるには、どんな勉強をしたら良いですか」と質問をしたのです。その時、有馬先生は「毎日国語辞典を一ページずつ読むことがいい」と教えてくれました。国語辞典を一冊全部読めば、私達の生活に必要な言葉はほとんど学ぶことができるからです。

早速全員で『子ども歳時記』とともに『国語辞典』を読む勉強を始め、全員が季語だけでなくたくさん言葉を知り、それを俳句の中でも使えるようになったので、見違えるようにレベルの高い俳句が作れるようになりました。そしてそれは俳句だけでなく、他の教科の勉強にも広がって、担任の先生をびっくりさせたのです。それ以後、私は子ども俳句会で縁のできた仲間には、必ず小学生用の『国語辞典』をプレゼントすることにしています。

俳句の勉強の仕方について

俳句を学ぶ最もよい方法は、句会に参加することです。この句会とは、分かり易く言えば俳句の勉強会のことです。それぞれのグループによっていろいろなやり方があります。ここでは、私が公民館の子ども句会でやっている方法を紹介します。

句会と言っても、小さな少人数のグループで楽しむ句会から、学校など数十人集まってする句会まで様々あります。私たちの公民館

子ども句会では、二十人くらいで行っています。句会にあたっては、まずあらかじめ句会に投句する俳句の数（出句数）を決めておきます。参加する人は、句会に参加する前に決められた数の俳句を作って用意しておきます。（先日行った玖珠町の小学校の句会では、句会の前に学校の周りを散策して句会に出す作品を作りました）句会に参加するために自分の作った作品を持って出掛け、会場では俳句を書く「短冊（細長い紙）」が配られますので、あらかじめ作っておいた俳句を短冊に書いて提出します。この時自分の名前は書きません。句会の世話をしてくれる人が集めた短冊をばらばらにして参加者に分け、その短冊とともに清記する用紙を配り、参加者に清記してもらいます。この時間違えないように丁寧に楷書で書き写します。全部書き終えたら、その清記用紙に「一」「二」「三」と番号をつけていきます。

次に選句をします。清記用紙を右の座席へと回していきながら、回ってきた清記用紙の句の中から良いと思った句を選んで自分のノートなどに書き写します。そしてすべての句を見終わったら決められた数の句をさらに選んで、選句用紙に清書します。この時用紙の右端に「牧野桂一選」と言うように、誰が選んだかが分かるように自分の名前を書いておきます。なおこの選句にあたっては、自分の作った俳句は自分では選ばないようにします。そして全員の選句用紙を集めて、いよいよ俳句の披講が始まります。

披講ではそれぞれの人が選句した句を句会の世話人が読み上げていきます。俳句の披講ですから、歌うように声高らかに吟ずること

が求められます。この時自分の俳句が読み上げられたら、「桂一」と大きな声ではっきりと名乗りを上げます。私たちが大分で行った句会でも有馬朗人先生は、この名のりの時「朗人」ととても大きなはっきりとした声で名乗りを上げていました。

披講が終わったら合評です。合評ではそれぞれの作品について、その作品の良かったところや問題になるところなどについて自由に意見を出し合っていきます。合評の最後にはその句会の世話人や指導者が、総括的な批評をしていきます。子ども俳句会では、選に入らなかった句も含めて全部の句について批評することが勉強になると思います。

吟行について

吟行とは、俳句を作るために実際の景色を見て、季語と出会うために外へ散策に出て行くことを言います。俳句を作りながら（吟しながら）歩くことで「吟行」と言うのです。この吟行は俳句を作る人たちにとっては、とても大切なものです。

俳句では俳句を作るために、郊外や名所など景色のよい所や旧跡などに出かけて行くことを言っています。最近では外国にまで出かけて行くような大がかりなものもあります。先輩や仲間と一緒に出かけ、同じものを見て俳句を作るので大変勉強になります。自然に触れてそこにあるものを通して俳句を作るので、草や鳥や虫などの季語を覚えることもでき、とても有意義なものです。

俳句における選句について

俳句の特徴として選句があります。つまり自分で俳句を作るだけでなく、人の作った俳句の良し悪しを選別して、良い句を選ぼうわけです。ここでは「どういう俳句が良い俳句なのか」ということを考えて自分で選ばなくてはなりません。慣れない時にはとても戸惑ってしまいます。この選句の場で「どの俳句が良くて、どの俳句が悪いのか」を考えていく場合大切なことは、自分が好きかどうかです。つまりその作品を読んだ時にすつと心に入ってくるもの、単純に「この俳句には引きつけられ自分は好き」と思う俳句が一番良い句と考えるのです。このように言うと「本当にそれでいいのか」と少し不安になるかも知れませんが、俳句を読んだ新鮮な自分の感覚が大切なのです。何の雑念もなくまっさらな心で選ぶことができるのは、読んだ自分の新鮮な気持ちしかありません。だからどこまでも自分の感性、価値観を信じて選ぶのが一番いいのです。

良い句を探す時は自分が良いと感じる句を探すのが第一であって、他人が良いと感じる句を探すのではないと言うことです。人は他人とは違う感じ方をするのが当たり前です。この違いが俳句でも他の芸術でも大切なことです。これは、俳句を作る時と全く同じことです。人の意見に同調ばかりしていると、人とは違う感じ方をするのが出来なくなりまします。「人とは違う感じ方をする」「自分らしい感じ方をする」ことが、文学である俳句の最も大切な要素で、それが俳句を作る原動力になり、俳句を作る喜びにもなります。

高浜虚子は「選は創造なり」と周りの人たちに教えていました。つまり俳句では、人の作品の選をすることは、自分の作品を創ることと同じように大切であることを教えてくれているのです。

ここで今回の大会の入選作品の選句について説明を付け加えれば、私たち選者は特別な俳句の指導をする立場にはありませんので、皆さんの作品を添削することはしておりません。一般の句会で選をするのと同じように、私たち選者の良いと思った作品を選んでいきます。したがって、誤字脱字や表記に明らかでないもの、内容を読み取ることができないものは、いくら内容がよいように見えなくても入賞・入選句の中には入っておりません。

子どもの俳句指導者へのお願

最後に俳句の学び方について、野見山朱鳥がある著書の中で面白いことを教えてくれていますので紹介したいと思います。

俳句雑誌「ホトトギス」の黄金時代を作った俳人に村上鬼城という人がいました。その鬼城は句会の指導で、選に漏れた作品を取り上げ、その欠点について詳細に解説したそう、その指導の仕方が的確で分かり易く、皆を納得させるものであったため、とても人気が高く鬼城に俳句の教えを乞う人がたくさん出てきたと言います。

一方俳句雑誌「ホトトギス」の主宰者である高浜虚子は、入選した作品の良いところを指摘して誉めるだけであったと言います。この二人の指導の結果として、高浜虚子の弟子からは、次々と俳壇をリードするような優秀

な俳人が出てきましたが、村上鬼城の門下からは虚子の門下ほどには俳壇をリードするような俳人は生まれなかったのです。

人は自分の欠点は案外自覚しているのですが、長所はなかなか見え難いと言うことでしょうか。指導する方としても俳句の欠点を探すのは割に簡単にできるのですが、逆に良い所、優れている所を見つけることは難しいと言うこともかも知れません。ちなみに有馬朗人先生は、子どもの指導の中で欠点を言ったり、添削したりすることはほとんどなく、一つ一つの作品の良い所を取り上げて丁寧に教えて下さいました。これからも子どもも俳句会などで児童生徒の俳句の指導にあたり、皆さんが中心になって句会をしたりして俳句を教える機会がある時は、このことも俳句の特性であることを覚えておいていただけたら有り難いと思います。



日本童話祭（久留島武彦顕彰）

第四十三回全国児童生徒俳句大会

特選句

JR 九大本線 豊後森駅

小学校

大分県	クリスマスサンタも腰が痛そうだ	玖珠町立 森中央小学校	6年	岩切晴優
大分県	秋桜をきれいといった君の声	玖珠町立 塚脇小学校	6年	渡邊紗和
大分県	ゆかた着てきみと見上げたぎおんやま	日田市立 桂林小学校	5年	綾垣優里
大分県	水遊びみんなどろんこいい笑顔	大分市立 明野西小学校	6年	森田朝陽
大分県	ひきざんがすきになったよさくらんぼ	大分市立 坂ノ市小学校	1年	日野奈々子
大分県	もう三年すくった金魚二十四匹	佐伯市立 佐伯小学校	3年	青山琥士朗
大分県	母の日はお母さんよりおばあちゃん	佐伯市立 佐伯小学校	4年	亀山莉緒
大分県	妹が一年生に進化した	佐伯市立 佐伯小学校	5年	徳永暦
大分県	ミヤクミヤクのいしようにおどったぼんおどり	臼杵市立 臼杵南小学校	2年	中西美空
大分県	にあつてる新入生とランドセル	臼杵市立 臼杵南小学校	4年	荻野太陽
北海道	入学式一年生のお手伝い	小樽市立 山の手小学校	6年	阿部梅乃
群馬県	金魚たち私の愚痴をご静聴	高崎市立 城東小学校	6年	高山愛湊
東京都	おし花を国語じてんにはさんだよ	武蔵村山市立小中一貫校 大南学園第七小学校	3年	加藤太一

東京都 初めての海にびっくり夏休み
 富山県 じいちゃんとやきそば食べる夏休み
 富山県 ばあちゃんのとたりでねむる夏休み
 富山県 ししまいのあとついていく秋まつり
 富山県 こんにやくのつめほうだいにもえる夏
 富山県 夏休みせんきよの声がわめきだす
 富山県 立山で発見雷鳥の親子連れ
 富山県 リスみたい口いっぱいのえ方まき
 愛媛県 たこ上げて親子で風になりたがる
 福岡県 九のだんがバツチリ言えた文化の日
 鹿児島県 はじめてのかけっこ大すきうんどうかい
 スイス 夏の朝電車に乗ってツエルマツト

武蔵村山市立小中一貫校 大南学園第七小学校 4年 杉田和真
 高岡市立 伏木小学校 3年 角村海翔
 高岡市立 伏木小学校 3年 脇田万央
 高岡市立 伏木小学校 3年 吉川参汰
 高岡市立 伏木小学校 4年 水戸芽依
 高岡市立 伏木小学校 5年 吉井英都
 高岡市立 伏木小学校 6年 田子実友梨
 高岡市立 伏木小学校 6年 湊彩華
 愛媛大学教育学部 附属小学校 2年 若狭早
 嘉麻市立 嘉穂小学校 2年 廣渡月敬
 伊佐市立 湯之尾小学校 1年 小林綾香
 チューリッヒ 日本人学校 5年 角方宗馬

中 学 校

大分県	眠れずに見上げる夜空天の川	玖珠町立 くす星翔中学校	3年	梶原奏太
大分県	川遊び川に映った虹の橋	日田市立 前津江中学校	1年	後藤愛莉
大分県	露天風呂ふと空見ると天の川	大分市立 大分西中学校	3年	鶴田安津樹
大分県	天の川一本の道故郷へ	大分市立 大分西中学校	3年	加嶋大哉
大分県	スマホとペン行ったり来たりの文化の日	大分市立 大分西中学校	3年	藪亀芭奈
大分県	キラキラと魚が踊る夏の川	佐伯市立 昭和中学校	3年	田辺琉輝歩
大分県	扇風機宇宙人に声変わり	日出町立 日出中学校	2年	堀ななみ
大分県	コンクリの割れ目にて咲く秋たんぽぽ	日出町立 日出中学校	2年	松田慶人
大分県	七夕の願いよ届け青い恋	日出町立 日出中学校	3年	熊本翔
宮城県	手をつなぐために手袋つけません	岩沼市立 岩沼中学校	2年	本郷真望
東京都	指先も紅葉とともに赤くなる	江東区立 深川第五中学校	2年	升岡茜
神奈川県	善光寺静まり蝉の声ひとつ	栄光学 園 栄光学 園 栄光学 園	3年	石塚有真
神奈川県	寒いねと言えば瞳に咲くオリオン	栄光学 園 栄光学 園 栄光学 園	3年	多田悠真

徳島県 氷河よりナウマンゾウも泳ぎだす

徳島県 親友に「ごめん」が言えた夏の空

福岡県 扇置く夕暮れの部屋音ひとつ

福岡県 夏休み永遠の平和を誓う時

福岡県 イライラをぐっと飲みこむ雲の峰

福岡県 後輩が決めた一点天高し

長崎県 虹の道つづく未来をふみしめて

高等学校

大分県 風撫でる大根干す手の深いしわ

大分県 雪の中二人でくつつきあたたまる

大分県 こたつ猫夢の中まで丸くなる

大分県 花火散る君の横顔見てしまう

埼玉県 秋晴れに走る子ども声ひかる

埼玉県 長き夜や鎖骨の上のあざふたつ

美馬市立 江原中学校 1年 坂本孝仁

徳島文理中学校 2年 中村拓夢

筑紫野市立 筑山中学校 2年 松尾直明

筑紫野市立 筑山中学校 2年 吉村勇志

古賀市立 古賀東中学校 2年 太田陽翔

古賀市立 古賀東中学校 2年 古賀那沙

長崎市立 深堀中学校 2年 関碧唯

大分県立 玖珠美山高等学校 1年 佐藤寧音

大分県立 玖珠美山高等学校 3年 梅木裕也

大分県立 玖珠美山高等学校 3年 平田如之介

大分県立 玖珠美山高等学校 3年 馬越友梨

埼玉県立 狭山緑陽高等学校 1年 鈴木花凜

星野高等学校 1年 黒木萌那

東京都 自販機の光も濡るる時雨かな

神奈川県 入道雲へツドホンから雨の音

神奈川県 起きていま窓を覗けば山眠る

岐阜県 地下足袋のままのぶらんこ缶コーヒー

岐阜県 ささ濁りさび鮎の影ふくらんで

大阪府 オリオン座寒い夜空の三角形

鳥取県 これは君こっちは私雪だるま

山口県 夕焼けにフルート吹いてをりにけり

日本大学 第二高等学校 2年 高岡奈央

横浜市立 ろう特別支援学校 3年 北畑蓮

横浜市立 ろう特別支援学校 3年 後藤佑輔

鶯谷高等学校 2年 越田晃太郎

鶯谷高等学校 2年 グリニック・ソフイー

香里ヌヴェール学院 高等学校 1年 西村明希

湯梨浜学園 高等学校 1年 濱野梨奈

山口県立 下松工業高等学校 1年 中川亜美



入選句

日本童話祭（久留島武彦顕彰）
第四十三回全国児童生徒俳句大会

玖珠 IC を見下ろす赤鬼像

小学校

〔大分県〕

玖珠町立森中央小学校

青い空くろい手ぶくろ七五三
 なつやすみぎおんがくるよたのしいな
 夏に見る木につかまったカブトムシ
 冬の夜モニタリングで広瀬すず

玖珠町立塚脇小学校

なつやすみみずでつぼうでたいけつだ
 なつやすみばあばのおうちでバーベキュー
 おちてきたおちばをぼうしでキャッチする
 サンタさん新さくゲームよろしくね
 ふわふわの雪のベッドでひとやすみ
 どんぐりにぼうしをかぶせてかわいいね
 お祭りだ音が流れるいい太鼓
 つばめの子えさを求めて口開ける
 どんぐりはまわってどこにいくのかな
 流れ星山に登ってねがいごと
 カスミノウ幸せ運び笑顔咲く

玖珠町立小田小学校

春が来た新しい自分おでむかえ
 赤とんぼ華麗に飛んで美しい

玖珠町立北山田小学校

あったかいぼうしをかぶってゆきあそび
 ねてまつとおきてうれしいクリスマス
 なつまつりステキなおみせたのしそう
 着物着て弟と撮る七五三
 青嵐ノートの角をめくりゆく

玖珠町立八幡小学校

ツバメがね春を告げるよ南から

いもほったママのてんぶらたべたいな
 ひまわりは高いぞどんどん高くなれ
 カマキリがみんなだいすき手にのせる
 麗しい秋の池に金の鯉
 大変だ日本全国冬支度
 秋の池座っていたら鯉が来た
 内匠の景水面にうつる秋の山

玖珠町立くす若草小中学校

ハゼノキを船にみたてて海わたる
 春の風コイの大群踊ってる

日田市立桂林小学校

青嵐ふいて流れて葉と話す
 夏休み風のようにすぎさった

日田市立津江小学校

まん月を見ながら食べるさつまいも
 赤とんぼじゅみようみじかいゆうびんや

大分市立城南小学校

あつくてもバツタはいつも大ジャンプ
 風りんの良い音聞いてねむくなる

大分市立明治小学校

しゃぼん玉空のかなたで音がなる
 ソーダ水口の中であばれだす

大分市立大在小学校

かがみわり家ぞくで食べた寒いへや
 ばあばんちゴジラみたいないもをほる
 お母さんスマホをしずめ秋終わる
 玉入れをみんなに入れて秋の空

朝早く空の道ゆく渡り鳥

秋の風がんばることをがんばるぞ

大分市立坂ノ市小学校

えんぴつがとがってひかるなつのほし

学校法人別府大学明星小学校

キンモクセイあまいじゅうたん通学路

おいしいよくりのようかん食べてみて

別府市立山の手小学校

夏の夜に北斗七星北の空

中津市立樋田小学校

聳え立つ山のふもとに月が出た

宿題を盆の月見て考える

佐伯市立佐伯小学校

夏休み染め物研究花もよう

夏休み大島ゆきの船にのる

子どもの日かぶとの剣を抜いてみた

初泳ぎ重き水たちかきわけて

卒業式泣いてる母と笑う兄

臼杵市立臼杵南小学校

おもちつきのびのびのびるおいしいな

山なみもピンクにそまる山ざくら

夏の空きれいな三角見えてくる

竹田市立祖峰小学校

熱中しようけいかいアラートなりひびく

星月夜蠍が僕を見下ろした

竹田市立城原小学校

ひまわりがいっぱいのびてびつくりだ

松原で落ち葉のベットを作りたい

旅行する島から島へわたり鳥

宇佐市立宇佐小学校

さるすべりほんとにさるがすべりそう

由布市立阿南小学校

ばあちゃんときなこのもちを食べたいな

家のにわつばきがぱつとさきほこる

由布市立東庄内小学校

ひらひらと桜舞い散る遊歩道

七夕に書いては願い叶うかな

由布市立西庄内小学校

お月様ちかくに見えて手がとどく

虫たちの自然の音楽ひびく夜

〈北海道〉

小樽市立山の手小学校

春ですねそつえんしきがありますね

もうふぶき校歌せいしょう体育館

ひらひらと落ちる葉っぱをうけとめる

雪景色視線に響く君の声

サンダルをぬぎすてとびこむ青い海

桜まう別れの時になお落ちる

今日の風コスモスとんでさようなら

〈宮城県〉

学校法人聖ドミニコ学院小学校

龍寶寺稚児は笑顔の花祭り

〈茨城県〉

常総市立玉小学校

ザリガニをやつとつかんだぼくの勝ち

稲敷市立あすま西小学校

千葉県のあまーいなしがたべたいよ

ドンドンと夜空に上がる大花火

1年 秋吉里保

2年 りょうかいるあ

3年 三重野寧音

6年 佐藤瑠果

6年 横井芽花

3年 衛藤照輝

5年 松下萌笑子

2年 大富岳

3年 高橋凱斗

4年 吉川椿紗

5年 向田有那

6年 中野悠翔

6年 小野優太郎

6年 佐藤仁紀

6年 阿部英明

4年 大野葵

4年 山口結愛

4年 藤澤心陽

〈群馬県〉

高崎市立城東小学校

さつまいも土からひよっこ顔出した
 5年 土岐綾音
 暑くなり背のびはじめた温度計
 6年 朝比奈 茉那
 休みの日まどから見えるつばめのす
 6年 竹下 咲良
 あの雲にシロップかけてかき水
 6年 谷川 宗助

〈埼玉県〉

川越市立名細小学校

雷神のお腹ぼっこりお正月
 3年 大室 史華

坂戸市立勝呂小学校

ひまわりはまよいなくさく太ようへ
 3年 田中 桜彩

〈東京都〉

文京区立青柳小学校

たきのよこ千本桜きれいだな
 3年 金子 桐佳
 空高く早く会いたい天の川
 4年 坂本 百香
 やっときた祖母の家だけのかしわもち
 4年 末原 知華

葛飾区立柴原小学校

でこぼこで不思議な形いわし雲
 4年 小野坂 毅
 旅先でたなばた祭りたんぎくに
 5年 谷 仲 晴太
 流れ星いえるわけない三回も
 6年 井熊 藍唯
 雪だるまトコトコ歩きお出かけに
 6年 川口 希愛
 木々の中縦横無尽にムササビが
 6年 坂上 颯一
 空を見てこんぺいとうの流星群
 6年 原 紬希

武蔵村山市立小中一貫校 大南学園第七小学校

夏休みみずでつぼうでたたかいた
 1年 岡 翔大朗
 くまさんがどんぐりさがしまちにきた
 1年 大西 悠生
 ひまわりはなつのおわりにおじぎする
 2年 宮内 菜央
 キャンプの夜クワガタたくさんつかまえた
 2年 末松 玲
 とつきゅうのかいじにのつてはかまいり
 2年 上野 柚貴

冬休みしゆくだいでっさり出るよかん
 3年 藤岡 咲良

とみんの日母が仕事で家1人
 3年 中村 悠人

夏の日に足元見ればスズメバチ
 4年 伊藤 誠人

草の先でんとう虫がとまつてる
 4年 西原 絢葉

まつたけでまつたけごはんいいにおい
 5年 原野 葵

母の日にかたもみけんをあげたんだ
 5年 松島 楓真

富士山は冬だけぼうしをかぶる山
 5年 山崎 彩叶

夏の夜じゅえきがある木にカブトムシ
 6年 中村 碧杜

湖で秋の蛙が呼んでいる
 6年 小林 立暉

家でする心機一転衣替え
 6年 三宅 右莉

どんぐりをひろつていたらリスがいた
 6年 矢島 佳

友愛インターナショナルイスラミックスクール
 5年 ライフェアルムユカリ

放課後に桜の下で君を待つ
 5年 ライフェアルムユカリ

田園調布雙葉小学校
 1年 橋本 真緒

うちみずのみずがあちこちとびまわる
 1年 橋本 真緒

〈神奈川県〉
 横浜市立元石川小学校
 高台寺茶室の壁にヤモリの子
 5年 荒川 麻梨子

なつやすみでつかいさめがおよいでる
 1年 吉原 瑞翔

すいそうのじんべいざめはずしそう
 1年 山田 和禾

あさがおが十二こさいたしんきろく
 1年 奥川 莉央

かぶとむしほくがねむるととびまわる
 1年 成田 悠樹

きょうりゅうがうごいたなつのくらいへや
 1年 濱谷 璃人

ぼくはかさママはスコップゆきをかく
 2年 大谷内 貴史

あせだくのシュートきまつたハイタッチ
 2年 岡田 幸大

きょうりゅうのきばでつかいぞ九月くる
 2年 岩坂 蘭叶

横はまで年こしそばを食べる夜
 3年 田子 結芽

歌とげきわらって春のチンドンや

3年 永谷 陽 莉

秋祭り太この音におどり出す

4年 高野 彩 花

にいちやんのしたか青色かき水

4年 山本 隼 成

すきとおるいとこと遊ぶ夏の川

4年 太田 空 翔

カウベルのサンバのリズム九月来る

5年 魚 倉 暁 人

らんかんのすき間に上がる大火花

5年 岩 坪 権 乃 子

うぐいすがねぼうのわたしをおこしてる

5年 向 美 登

おもちやく魚の形にふくらんだ

5年 舟 本 朱 璃

イルカショーのかわいいダンス夏の空

5年 浜 田 永 花

友だちとびよんぴよんはねているプール

5年 満 田 航 大

朝の道家族みんなで初もうで

6年 阿久津 結 羽

宿題の窓にきている天道虫

6年 山 須 香 涼

山頂へあせかきながらペダルこぐ

6年 須 和 虎 雅

初もうでわすれてしまったねがいごと

6年 角 村 昂 瑠

〈愛知県〉

南山大学附属小学校 (リトルランド)

たん生日わたしをいわってさくらさく

2年 澤 田 実 伶

名古屋市立陽明小学校 (リトルランド)

青い空入道雲におわれてる

4年 吉 田 桂 菜

〈鳥取県〉

鳥取市立青谷小学校

入道雲水平線で仁王立ち

4年 長 戸 智 柳

夏草をしきつめひそむひみつきち

5年 伊 藤 結 一

〈広島県〉

安芸太田町立筒賀小学校

広がるよ黄色いじゅうたん大イチョウ

3年 藤 本 すすか

ふうりんと風も一緒に歌う夜

5年 渡 菜 々 緒

森の中おどるどんぐりぼうしどこ

6年 今 本 恋 歌

〈愛媛県〉

愛媛大学教育学部附属小学校

水でつぼうおでこに当たりかゆくなる

2年 若 狭 早

〈福岡県〉

嘉麻市立稲築西義務教育学校

ヒヤシンス小さなねっこがこんには

1年 松 本 星 成

嘉麻市立上山田小学校

秋の海遠くに福岡タワー見え

4年 江 頭 希 々 花

〈鹿児島県〉

伊佐市立湯之尾小学校

秋の山きのこがニョキッと出てきたよ

3年 井 上 翼

帰り道へびがいたけど気づかれず

5年 中 村 柚 稀

砂はまですいかのたねを飛ばしあう

6年 石 川 要 斐

〈スイス〉

チューリッヒ日本人学校

船の上アイスクリームとけちゃった

5年 畦 地 百 花

中学校

〈大分県〉

玖珠町立くす星翔中学校

夏祭り空に輝く一番星

2年 中 島 綜 太

空を飛ぶ目で追いかける青い鳥

2年 秋 好 皇 輝

雨上がり濡れ輝くはチューリップ

2年 江 藤 舜

ゆきだるまいつものそとでさむくない

2年 佐 藤 志 音

雪だるま作ったあとの手は真っ赤

3年 麻 生 蓮 華

夕立でグラウンド照らす二重虹

3年 神 田 龍 怜

霜の窓指で描けば陽がこぼれ

3年 匿 名 希 望

校舎窓ゆっくり白く冬来る

3年 藤 元 輝 弥

彼岸花血が飛ぶような紅い色

3年 吉 永 和 仁

山車神輿えさいやいさとはやす衆

3年 米本 虎

日田市立前津江中学校

金木犀ふわりと香る帰り道

1年 梶原 実花子

大分大学教育学部附属中学校

炎天や揺らぐ視界に映る君

3年 山内 凜太郎

大分市立大分西中学校

ミーティングボスの帽子に赤とんぼ

3年 手柴 遼太郎

秋になりかぼちゃに顔ができました

3年 牧野 心結

金風で舞い散る葉っぱ弧を描く

3年 野田 あかり

名月や隣の灯りまだ消えず

3年 花田 詩穂

香り立ち松茸の味お吸い物

3年 佐藤 颯

弟と鯛をえさにアオリイカ

3年 阿部 勸太

松茸がほのかに香り箸進む

3年 奈須野 晃

秋の暮夕日が空を染めあげる

3年 森崎 梨桜

滝のぼるサケを狙う熊狙う人

3年 荒金 淳平

大分市立大在中学校

渡り鳥青のキャンパス描いてゆく

3年 山添 颯真

贅沢をしてこそ綺麗お辞儀草

3年 藤本 沙和

澄み渡る夜空に広がる冬銀河

3年 大塚 利紗

強かに一輪咲きて冬椿

3年 弓山 華

檸檬の木漂う香り神無月

3年 永松 世菜

遠ざかる君の背後に散る桜

3年 梶原 鈴央

清水寺夕暮れ染まる紅葉の葉

3年 廣瀬 莉菜

不意に吹く蘭草が香る日暮れどき

3年 鈴木 優真

平松学園向陽中学校

はださむく湯気のむこうの父の顔

2年 今永 一嘉

別府市立別府西中学校

梅雨の日に色とりどりの橋かかる

2年 脇山 愛菜

中津市立本耶馬溪中学校

影長く伸びるグラウンド夏の暮れ

3年 宮名利 悠弥

佐伯市立昭和中学校

夏休み今年で十個プラモデル

3年 御手洗 侑

帰り道友の悩みにすみれ咲く

3年 山中 優香

風止んで静かに回る風車

3年 渡邊 捷人

梅雨明けて日本の夏がやってくる

3年 井上 陵大

蝉しぐれ止むとき耳に海の音

3年 高橋 尊人

佐伯市立米水津中学校

漆黒の夜に輝めく天の川

3年 長船 霸弥斗

盆踊り夜中に響く太鼓の音

3年 小畑 凜之介

臼杵市立東中学校

煌めける蛍のための暗闇よ

3年 佐藤 紗楽

マフラーに首をうずめて初詣

3年 小野 優羽

夜空より星が連なる天の川

3年 石井 穂乃華

冬が好きコタツに入る僕とネコ

3年 富田 瞬輔

竹田市立直入中学校

夏休みそうめん地獄到来か

3年 田北 寛仁

日出町立日出中学校

炎天下バトンが渡り走り出す

2年 村上 美藍

大阿蘇の野原の中の夏の蝶

2年 井口 音和

物語る木々が色づく銀閣寺

2年 道下 暁暉

夏休み家族と一緒に墓そうじ

2年 樋渡 結愛

サンングラスすけて見えてた波の声

2年 アスガリ イリイ

君と見た輝く月と流れ星

2年 河野 聖央

天高しそびえたつ壁二条城

2年 岡野 陸斗

ねころんだそこに広がるは鯛雲

2年 大坪 優輝

青空に夢を描いたシャボン玉

2年 山口 咲奈

えり巻きをあなたと巻きたい夜半の冬

3年 西山 夕七

土ですら綺麗に見える冬の川
雪だるま皆と作って皆笑う
稲の穂が私を囲み琥珀色
木がらしや別れを告げる合図かな

〈宮城県〉

岩沼市立岩沼中学校

星月夜木々と風とに包まれる
かぶと虫口マンあふれる姿かな
かたつむり目線合わせてこんには
かぶと虫息をひそめてつかまえる
麦藁帽お花畑で風にのる
かまくらの中で膨れる熱い餅

〈群馬県〉

高崎市立倉淵中学校

夏の夜ページめくるは扇風機

〈埼玉県〉

星野学園中学校

月明りすすきの穂にそつと触れ
時を經し瓦の上より冬の星

淑徳与野中学校

夕ざくら肩にリボンのほどこけをり

さいたま市立指扇中学校

風鈴が夜風に乗って歌ってる

〈東京都〉

国立東京学芸大学附属竹早中学校

新品の傘を片手に花の雨

東京電機大学中学校

ドア開けてかえるがスキップ土砂降りだ
収穫をまだかまだかとバケツ稲

江東区立深川第五中学校

紅葉舞う風の行方は富士の山
紅葉散る静けさ深く山の声
冬休み家族で囲むキムチ鍋
透き通る水面に浮かぶ金魚たち
けのびして夏をのばした水の中
剣道場素足にひびく冬の夜

友愛インターナショナルイスラミックスクール

秋時雨君の言葉が遠ざかる

〈神奈川県〉

栄光学園中学高等学校

木枯や体を抜ける帰り道
早星仰ぐ空には道しるべ
晦日蕎麦駆ける列車と終わる年
風鈴がチリンと揺れて夏が来た
瑠璃色の透いた想いとラムネ玉
聖なる日スマホの充電だけ満ちて
陽があたり光る窓際金魚鉢
箱根山水面に君と紅葉かな

〈岐阜県〉

川辺町立川辺中学校

母親の口元ゆるむ月見酒
大掃除秋がいつぱい落ちて
木枯らしが家の中でも吹くわが家
テスト前窓のみじに気を取られ
柿の木が私の身長追いこした

鶯谷中学校

点滴の処置室いわし雲やはら

3年 川崎雅怜

3年 曾我悠人

1年 上野咲

2年 大出武瑠

3年 伊部歩花

3年 柿沼さくら

2年 安食めるも

2年 西谷隼

2年 堀内楓

2年 大久やまと

2年 安田心羽

2年 池田祥太

2年 平間翔太

3年 金子美優

3年 畔地大夢

3年 中根波琉人

3年 古本勇万

2年 阿部琥士郎

2年 池上俊太郎

2年 猪鹿野叶大

2年 岡田千寛

2年 竹内千晴

2年 増尾壮悟

3年 関司彩

3年 河井樂

3年 近藤貴馬

3年 澤村航

3年 中山達之祐

3年 土師大河

3年 深澤和真

3年 山口大翔

3年 湯山優輝

1年 松井晶飛

1年 河合芽依

1年 石丸奏太

1年 座間結愛

3年 土屋奈々

〈静岡県〉

裾野市立須山中学校

古都の香が微かに香る春の風
花吹雪旅立つ僕の背中押す
夏の家ゴールつけてハイジャンプ

2年 大澤 愛海
2年 山田 莉音那
3年 土屋 結翔

〈愛知県〉

名古屋市立千鳥丘中学校

小春日和学級菜園草むしり

1年 竹尾 志織

学校法人南山学園南山中学校 (リトルランド)

ゆうやみに花火が上がる帰り道

1年 吉田 楓菜

〈大阪府〉

大阪市立長吉六反中学校

夏休みやりたいことだけやればいい
かたつむり雨降る花の上一人

2年 山入端 琉夢
2年 トレスマリアローレ

〈鳥取県〉

湯梨浜学園中学校

帰り道田んぼの上に赤トンボ
川遊びはしゃぐちびつ子夏休み
ひいばあ弱々しい手秋時雨
夕立や部活帰りの濡れ笑顔

1年 大西 愛莉
2年 太田 蓮士
2年 長田 彩音
3年 稲垣 古都

〈島根県〉

益田市立益田中学校

花粉とぶやる気も一緒にとんでいく
桜散る言えぬ想いがあとひとつ

3年 末若 莉蘭
3年 弘中 優萌

〈徳島県〉

美馬市立江原中学校

ハロウインの闇夜に溶けて影となる

1年 坂本 孝仁

〈福岡県〉

筑紫野市立筑山中学校

早苗田にうつる自分とにらめっこ
かまきりが壁にはりつく暗い夜
夏休み水族館のイルカショー
夏の夜一等星が輝いた
紫陽花の回りを走るアマガエル

2年 鳥谷 羽那
2年 倉橋 煌
2年 小林 芽依
2年 村杉 真優
2年 尾崎 祐仁

古賀市立古賀東中学校

秋高し徒然草を暗唱す
くさじらみくつつけ合って帰り道
合唱の声高らかに秋高し
夏の浜宝石みたいなシーグラス
夏の朝インコぱちやぱちや水遊び
花は葉に自分の成長目に見えて
部屋中に漂う匂い栗ごはん
秋晴や目指せピンクのユニホーム
新人戦チームの息がそろう秋

2年 松崎 慶人
2年 横山 太勇
2年 竹田 魁
2年 原 芽希
2年 芥川 智哉
2年 浜崎 晃妃
2年 品川 駿斗
2年 井上千花
2年 結城 春花

〈長崎県〉

長崎市立深堀中学校

ゆきだるま友達みたい立っている
冬銀河宇宙を蹴って一直線

1年 山崎 裕奈
3年 中川 千菜

〈沖縄県〉

宮古島市立伊良部島中学校

蝉時雨指揮をとるのはこの私

2年 仲間 妃菜

高等学校

〈大分県〉

大分県立玖珠美山高等学校

新しいスカートひらり春の風

1年 高橋 沙和

梅雨入りや制服ぬらす帰り道
寒風や笑いこぼれて坂の道

1年 甲斐 幸音
1年 湯野 翔太

新米の湯気に映えてる母の顔

1年 麻生 采花

母と見た部活帰りのオリオン座

1年 土井 誠生

新米のニュース横目に古古古米

1年 松葉 優香

豚汁にじゅわつと広がる大根汁

1年 志手 南海

七人で食卓囲み冬野菜

1年 日野 奏斗

制服に舞つたいちよりの胸飾り

2年 梅木 優羽奈

冬の朝銀杏散り敷く通学路

2年 S・M

影重ね裸足で駆ける夏の海

2年 赤峰 ころこ

雪の降る凍った湖二人きり

2年 清水 翔太郎

帰り道君の頭に積もる雪

2年 平井 さくら

水田に独りアメンボどこへ行く

3年 衛藤 賢史朗

春風に運ばれ聞こえる笑い声

3年 谷崎 幹律

橋の下鯉とゆらめく花筏

3年 魚返 未來

畦道を蜻蛉と共に駆け抜ける

3年 河野 颯汰

手をこするきみの仕草に冬をみる

3年 衛藤 明

首稽想いを編み込む冠よ

3年 佐藤 みさき

帰り道ころび見上げる星月夜

3年 梅木 裕也

第一歩新たな道への桜咲く

3年 高橋 撞生

西瓜割り青天響く笑い声

3年 平田 如之介

胡桃割り動物達の演奏会

3年 藤原 陽人

暗闇に花火の音と光る君

1年 藤井 陽彩

太鼓打つ音にまぎれて夏が去る

1年 越智 心咲

鞍の上春風受ける日の光

1年 板井 琉倭

先輩を想う私はツキミノウ

2年 兼川 耀養

スマホ置き見上げた空に天の川

2年 玉田 日和

エアコンと夏の補習と単語帳

2年 戸高 夏穂

夏霞集めたやうなシーグラス
茨城県

3年 大見 蘭

茨城県立古河第一高等学校

運動会スタート前の息ひとつ

3年 柴 綾菜

埼玉県

埼玉県立狭山緑陽高等学校

校庭の中を走れば初紅葉
かくれんぼ子どもととんぼ帰るまで

1年 原 巧

子どもらの叫び声聞き文化の日

1年 清水 桃香

岩陰の子どもが帰る稲雀

1年 佐藤 優唯

星野高等学校

3年 大西 真優

子の手から抜ける風船空高く

1年 鈴木 実結

春雨や語り継がれるかぐや姫

1年 黒田 紗矢

夕千鳥折れた定規を持ち帰る

1年 関口 和奏

風見鶏向きを変えたり冬隣

1年 永塚 真歩

コーヒーの揺れ緩やかに夜長かな

2年 新井 咲那

街ゆく子案山子の影の長さかな

2年 酒井 真結子

匂ひ立つ古き手紙や炭火欲し

2年 土居 かえな

千葉県

渋谷教育学園幕張高等学校

2年 矢野 麟太郎

東京都

中央大学杉並高等学校

3年 佐治 心結

神奈川県

横浜市立ろう特別支援学校

1年 上原 鍊太

蛍火の行き交ふ闇に川の声
涙ぐむふと見上げれば天の川

3年 菅原 愛織

はじけ散る花火の音に鼓動鳴る

3年 菅原愛織

〈長野県〉

長野県野沢南高等学校

迎え盆お馬に乗っていらっしやい

2年 田中莉駆

〈岐阜県〉

鶯谷高等学校

草に臥す駱駝のまつげ春の風

1年 田中萌

田一枚植ゑてふるさと息づけり

ロッカーにジャージ・置き傘・月鈴子

秋蟬や自由研究百日目

千枚田ゆく一両電車秋夕焼

2年 栗本七碧

〈大阪府〉

香里ヌヴェール学院高等学校

紅葉見て初めて手にした朱印帳

ふと空を窓から見れば流れ星

関西大倉高等学校

微積より紅葉気になる参考書

2年 池上絢悠

〈兵庫県〉

神戸市立須磨翔風高等学校

ラーメンに君の笑顔を隠し味

桜散る風の流れを袖に受け

寒いねと目と目合わせて笑い合う

落ちてゆくつららに映る赤い顔

1年 井塚翔一郎

〈鳥取県〉

湯梨浜学園高等学校

夏休み勉強よりも甲子園

盆踊り太鼓響いて手を上げる

1年 小野胡々菜

〈岡山県〉

岡山県立岡山朝日高等学校

かくれんぼ後の障子に小穴かな

2年 高祖桃香

〈山口県〉

山口県立下松工業高等学校

自転車で凸凹小道桜風

残る月銀鼠色の製図器具

1年 松原征春



五七五は四季の詩^{うた}

大分県俳句連盟

会 長 吉原 白天



玖珠ライオンズクラブ

会長テーマ「助け合い」

会 長 L 梶原 俊二

幹 事 L 田嶋 正博

会 計 L 湯浅 亮

UNITE FOR GOOD

よいことのために手を取りあおう

2025-2026国際ロータリーのテーマ



玖珠ロータリークラブ

会 長 藤本 祐子

〒879-4403 玖珠郡玖珠町大字帆足390-3（望山荘内）

TEL 0973-72-0187





一般社団法人

玖珠町観光協会

伐株山

万年山

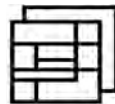
〒879-4404 大分県玖珠郡玖珠町大字森995-2
TEL 0973-72-1313 FAX 0973-72-1373

URL : <https://kusumachi.jp>
Email : info@kusumachi.jp



50周年記念に沖繩旅行に行ってきました。

再生産可能な森林資源の有効活用をめざして



新栄合板工業株式会社



〒879-4401 大分県玖珠郡玖珠町大字四日市848番32 TEL0973-77-2112 FAX0973-77-2113



一般社団法人 くすみち



道の駅 童話の里くす

〈直売所・土産・レストラン・パン・ファストフード〉
〒879-4403 大分県玖珠郡玖珠町大字帆足2121
TEL 0973-72-5535 FAX 0973-72-5591
URL <http://www.kusu-michinoeki.jp>

道の駅 慈恩の滝くす

〈直売所・土産・ファストフード〉
〒879-4332 大分県玖珠郡玖珠町大字山浦618-4
TEL 0973-77-2260 FAX 0973-77-2261



商工会は一番身近な相談所
金融・税務・経理・経営・労働
などのご相談は



玖珠町商工会

〒879-4403 玖珠郡玖珠町大字帆足125-1
TEL (0973)72-1211
FAX (0973)72-5712
<http://kusu.oita-shokokai.or.jp/>



2025年12月1日新規OPEN!



NIPPO

TOURISM

くす旅サービス

玖珠郡玖珠町大字帆足262-21
TEL: 0973-72-3070



介護保険サービスセンター
TEL 72-5090
通所・訪問リハビリテーション
TEL 72-5050
(市外局番: 0973
共通FAX: 72-6868)
大分県玖珠郡玖珠町大字塚脇113番地13

外科・胃腸内科・内科・小児科・整形外科・リハビリテーション科

医療法人 純和会 小中病院

〒879-4413 大分県玖珠郡玖珠町大字塚脇123
TEL.0973-72-2167(代)・FAX.0973-72-5199

産科・婦人科・内科・麻酔科・脳神経外科
(血液透析)リハビリテーション科

医療法人 友光会

友成医院

(代表) TEL 72-1788 (透析)
TEL 72-0330 TEL 72-0550 (脳神経外科)

〒879-4413 大分県玖珠郡玖珠町大字塚脇128-2

大分県 **さかもと村**

879-4522 大分県玖珠郡玖珠町山下 2224
メール: sakamoto.mura@abelia.ocn.ne.jp
<http://sakamotomura.com/>
村長携帯: 090-5297-1489

日田玖珠に来たら
地鶏のやぶ
電話注文・地方発送
承ります!
本店: TEL 0973-73-8641 (玖珠店)
〒879-4331
大分県玖珠郡玖珠町大字戸畑1209-1 (210号線沿い)



牧野 桂一（まきの けいいち）先生略歴

1947年大分市生まれ。

1970年大分大学卒。大分県内の小学校、養護学校に勤務の後、大分県教育センター研究員として教育相談に従事、研究部長を経て大分市植田小学校教頭へ。その後、大分県教委特別支援教育推進室長から臼杵養護学校、大分県立新生養護学校校長へ。その後筑紫女学園大学日本語日本文学科教授、大分大学・東亜大学・純真短期大学客員教授。その間、大分県警少年課大分っ子フレンドリーサポートセンターアドバイザー、大分大学客員教授等を努める。

現在は九州大谷短期大学非常勤講師、東亜大学客員教授、保育心理士会会長、大分こども発達支援研究所所長。1997年心身障害児教育財団より「辻村奨励賞」受賞。1998年「大分県教育功労賞」受賞。2025年玖珠町より「文化振興功労賞」受賞。大谷保育協会認定保育心理士会会長、俳人協会会員、大分県現代俳句協会顧問、俳句結社「天為」「朝鳥」「鷗座」「航標」「パピルス」同人
有馬朗人先生（1930年-2020年）のご推挙で、第32回全国児童生徒俳句大会（2015年）より選者となり、現在に至る。

秋篠 光広（あきの みつひろ）先生略歴

1940年大分市生まれ

1962年静岡大学農学部卒

1959年より作句 初学は「馬酔木」「海坂」に拠る

1960年より館山實先生に師事

1961年澤木欣一主宰の「風」に投句

1971年「風」同人

1978年第23回「風賞」受賞

1983年第29回「角川俳句賞」受賞

1990年「朝鳥」創刊 現在に至る

2002年「風」終刊により同人を辞す

（公社）俳人協会名誉会員 「朝鳥」主宰 俳人協会大分県支部顧問 大分県俳句連盟理事 大分合同新聞社読者文芸欄俳句部門選者 大分合同新聞社俳句教室講師 第41回全国児童生徒俳句大会（2024年）より選者となり、現在に至る。

裏表紙の「くるしま童話名作選」とは

明治・大正・昭和にわたり、楽しいお話にのせて、人として生きていくための教えを伝えた教育者久留島武彦の選りすぐりの童話を絵本にしてお届けします。

「くるしま童話名作選」は久留島精神「信じあうこと・助け合うこと・違いをみとめ合うこと」をテーマに、玖珠町が出版社と共に企画出版してきました。

現代の子どもたちが楽しめるように言葉や見開き、読み聞かせた時の耳から聞こえる語感にこだわって作っています。また画家も日本の絵本画家を代表する方をお願いして作画していただきました。久留島武彦先生が大切にされた「子どもの膝の前の友」として、ぜひ子どもたちに読んであげてください。

※平成31年3月末で10巻が刊行されました。



日本童話祭（久留島武彦顕彰）

第44回全国児童生徒俳句大会募集要項

【目的】「童話の里くす」は、日本の児童文化活動の礎を築いた「日本のアンデルセン・久留島武彦」を顕彰し、児童文化の高揚を図るという主旨のもと、全国より児童生徒の俳句を募集し、すぐれた作品を表彰する。

応募規定	<p>(1) 小学生の部・中学生の部・高校生の部の3部門とする。</p> <p>(2) 投句は一人3句以内とし、別記投句用紙にて投句すること。 ※団体投句の場合は、所定の総括表を必ず添付すること。</p> <p>(3) 投句については無料とする。</p> <p>(4) 投句は有季定型句に限る。季節は自由。</p> <p>(5) 盗作・二重投句は禁止する。</p>
募集期間	令和8年9月1日～11月30日（持込：必着 郵送：消印有効）
応募先 お問合せ	<p>〒879-4404 大分県玖珠郡玖珠町森868番地の2 玖珠町 わらべの館内 全国児童生徒俳句大会事務局 係 TEL0973-72-6012（休館日：毎週月曜日、月曜日祝日の場合翌日）</p>
大会選者	<p style="text-align: center;">牧野桂一先生 （俳人協会会員「天為」同人）</p> <p style="text-align: center;">秋篠光広先生 （俳人協会名誉会員「朝鳥」主宰）</p>
表彰式	<p>令和9年5月4日 玖珠町わらべの館にて ※情勢に応じて表彰式が中止となる場合があります。</p>
各賞	<p>久留島武彦賞（1点）※表彰式へご招待（国内受賞者のみ） 朗人賞（1点）※表彰式へご招待（国内受賞者のみ） 紘文賞（1点）※表彰式へご招待（国内受賞者のみ） 桂一賞（1点）※表彰式へご招待（国内受賞者のみ） 大分県知事賞（小学生の部1点・中学生の部1点・高校生の部1点） 大分県教育長賞（小学生の部1点・中学生の部1点・高校生の部1点） 玖珠町長賞（小学生の部1点・中学生の部1点・高校生の部1点） 玖珠町議会議長賞（小学生の部1点・中学生の部1点・高校生の部1点） 玖珠町教育長賞（小学生の部1点・中学生の部1点・高校生の部1点） 大分県俳句連盟会長賞（小学生の部1点・中学生の部1点・高校生の部1点） 大分県小学校長会長賞（小学生の部1点） 大分県中学校長会長賞（中学生の部1点） 大分県立学校長協会賞（高校生の部1点） 読売新聞社賞（1点） ※入賞句の決定は、令和9年3月頃となります。</p>
主催	日本童話祭実行委員会・全国児童生徒俳句大会実行委員会
共催	玖珠町・玖珠町教育委員会
後援	<p>大分県・大分県教育委員会・玖珠町議会・大分県俳句連盟 読売新聞社・大分合同新聞社・西日本新聞社・NHK大分放送局 OBS大分放送・TOSテレビ大分・OAB大分朝日放送</p>



日本のアンデルセンと呼ばれた久留島武彦先生は、明治7年大分県玖珠町で生まれました。

まだ10歳の少年だった頃、武彦先生は毎晩のよう
に、近所の日蓮宗のお寺へ説教を聞きに行っていました。彼は、算木で高座の端を叩きながら日蓮上人の一代記を語る、そのお坊さんの達弁のとりこになり、家に帰ってはこたつやぐらの上に座り、繰り返しまねをして家族に語っていたといいます。

「これが今日から考えてみると、私が『話』といふものに一生を繋げるようになったそもその端緒をなしている」と彼自身が言うように、この時人に語って聞かせる楽しさを知った少年は、その後、口演童話家への道を歩むことになりました。

また、日本の児童文化活動の先駆者として、日本初の「お話の会」開催や、「児童劇」の上演、「全国版子供新聞」の発刊などに次々と取り組みました。

アンデルセンの故郷デンマークでは、記念館設立に貢献したことで、「日本のアンデルセン」と呼ばれるようになりました。

日本中の子どもたちを魅了し、多大な業績を残した武彦先生の故郷大分県玖珠町では、彼に因んだ童話祭が、毎年5月5日に盛大に開催されています。

「子どもが育たなければ日本の将来はない」と、青少年の教育に生涯をささげた武彦先生の遺志を受け継いで、「全国児童生徒俳句大会」は、俳句を通して児童生徒の感性を育み、豊かな心を培うことを目的に開催しています。



全国初の「童話碑」が建立されて開幕した「第1回童話祭」の様子(1950年5月5日大分県玖珠町にて)

久留島 武彦 (くるしま たけひこ)

- 1874年 6月19日大分県玖珠郡森町(現・玖珠町)に生まれる。豊後国森藩藩主久留島家の末裔。
- 1887年 大分中学(現・大分県立大分上野丘高等学校)に入学、英語教師のウエンライト博士と出会う。
- 1890年 ウエンライト博士の関西学院転任に伴い関西学院へ転校。
- 1894年 近衛師団入隊。
- 1895年 日清戦争に従軍。戦地から「尾上新兵衛」の筆名で投稿した作品が雑誌『少年世界』(博文館)に連載される。
- 1906年 「お伽俱樂部」を設立し、口演童話活動を本格的に開始。

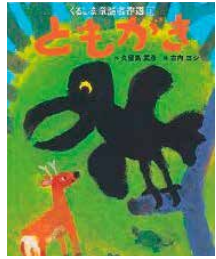
- 1911年 雑誌『お伽俱樂部』を創刊。
- 1924年 ボーイスカウトの第2回国際ジャンボリー大会(現・世界ジャンボリー、デンマーク)に参加し、アンデルセンの旧跡を訪問。アンデルセンの復権を訴え、2年後にデンマーク国王よりダンネブロウ四等勲章を受ける。「日本のアンデルセン」と呼ばれるようになる。
- 1951年 日本青少年文化センター(全日本移動教室連盟)初代理事長に就任。
- 1958年 話し言葉による童話を確立し、児童文化の向上に貢献したことによって紫綬褒章を授与される。
- 1960年 6月27日内臓ガンのため永眠(享年86歳)。日本青少年文化センターが「久留島武彦文化賞」を創設。童話の口演を行った幼稚園・小学校は全国6,000を超える。

発行
日本童話祭実行委員会
全国児童生徒俳句大会実行委員会
発行日 令和八年五月四日

	小学生の部	中学生の部	高校生の部	計
投句	5,692句	3,656句	1,296句	10,644句
入賞	10句	8句	8句	26句
特選	25句	20句	14句	59句
入選	154句	124句	66句	344句

この句集は、入賞・特選・入選の順で掲載しております。
なお、文字表記については、投句用紙に従いました。
学年は投句時のものです。

『くるしま童話名作選』集



『① ともがき』

嫌われ者のカラスは、ネズミと友達になりたいと頼みました。「怖いカラスと友達なんて！」困ったネズミは、仲良しのカメに相談することにしました。カメの助言により、シカも仲間に入れて友達になりました。そんな時に事件が起こり…。

「ともがき」とは、垣根のように分かちがたく、固い絆で結ばれた友達の事です。久留島武彦先生の名作童話の絵本化第1弾！

出版社：子どもの未来社
著者：久留島武彦(作)・古内ヨシ(絵) 価格：1,430円(税込)



『② 子どもいのり』

教会の天井の隅に、2匹のくもの親子が住んでいました。今夜はクリスマスイブ。大人たちが朝早くから集まって大掃除をはじめました…。

親子愛の深さと反省することの大切さ、そして悔い改めようとする者に救いの手を差し伸べる神の慈愛の尊さについての教えが込められた、久留島武彦先生の名作童話の絵本化第2弾！

出版社：幻冬舎ルネッサンス
著者：久留島武彦(作)・古内ヨシ(絵)
価格：1,430円(税込)



『③ ゆめうりふくろう』

「ゆめうりふくろう」は、今から60年まえに書かれたお話です。人間の子どもが見た夢を集め、その夢で森の動物たちを幸せにするふくろうの物語が遠山繁年さんの繊細なイラストで素晴らしい絵本によみがえりました。神秘的でユニークな、そして心あたたまるストーリーで子どもたちを惹き込むこの作品は、彼の数ある久留島武彦先生の代表作の一つです。絵本化第3弾！

出版社：子どもの未来社
著者：久留島武彦(作)・遠山繁年(絵) 価格：1,430円(税込)



『④ トラの子ウーちゃん』

「トラの子ウーちゃん」は、世界各国に赴いて見聞を広げ、それを基に多くの童話を残した久留島武彦先生の「虎の子の大発見」を絵本化した作品です。いたずらっ子のウーちゃんが「怖い人間」見たさにお母さんの言いつけを聞かずに山を下りて出会う冒険の数々が、ウーちゃんを大きく成長させます。読み聞かせにも最適、絵本化第4弾！

出版社：子どもの未来社
著者：久留島武彦(作)・篠崎三朗(絵)
価格：1,430円(税込)



『⑤ すずむし』

「すすむし」は、武彦先生が文学の道を志した22歳のころに書かれた作品です。すがすがしい良い音がならせないお宮のすすむしが、良い音を出すために修行の旅に出かける、ユーモラスな作品です。日本を代表する絵本画家の黒井健氏の手によって、ひたむきに、真剣に生きることの大切さが、ひしひしと伝わってくる絵本に仕上がりました。読み聞かせにも最適！

出版社：子どもの未来社
著者：久留島武彦(作)・黒井健(絵)
価格：1,430円(税込)



『⑥ ツバメのおんがえし』

ツバメの隼雄がせっせと巣をつくっています。それを見つけて、おばあさんが「おや、これは縁起がいい」と、うれしそうに言いました。昔から、ツバメが巣をつくる家にはよいことが起こるといふ言い伝えがあるのです。

ある日、隼雄が巣を固める泥を探していると、道端の溝の中から、何やらコソコソと話し声が聞こえてきました。そと降りて、のぞいてみると…

出版社：幻冬舎メディアコンサルティング
著者：久留島武彦(作)・篠崎三朗(絵) 価格：1,430円(税込)



『⑦ 月宮殿のおつかい』

「このままでは、おや子ともどもたべられてしまう。いったい、どうしたらいいのかしら…」狼に狙われるひつじおや子を助けるため、うさぎが考えたある方法とは？“愛”と“勇気”と“知恵”が詰まったうさぎとひつじおや子の物語。

出版社：幻冬舎メディアコンサルティング
著者：久留島武彦(作)・アヤ井アキコ(絵)
価格：1,430円(税込)



『⑧ 海に光るつぼ』

終戦後の日本で靴磨きをする少年ケンイチが、おばさんの家に遊びに行き、海の底で不思議な体験をして成長するお話です。物語を読み終えた時、ケンイチとともに大きく成長した子どもの姿が見られることでしょう。

出版社：幻冬舎メディアコンサルティング
著者：久留島武彦(作)・ゴトウノリユキ(絵)
価格：1,430円(税込)



『⑨ 弾きがえる』

音楽の大すきな三きょうだいがバイオリンを弾いていると、音楽の大すきなかえるが池から出てきて、たのみました。「うちに来てバイオリンを弾いてください。」さてさて、どうなることでしょうか…。

出版社：子どもの未来社
著者：久留島武彦(作)・市居みか(絵) 価格：1,430円(税込)



『⑩ なだれうさぎ』

峠の谷間にくらしている親子が、あるとき、なだれで家ごと埋まってしまう。おかあさん、たあぼう、ちいこが助けをまわっていると、いっぴきの白ウサギがとびこんできました……。

出版社：子どもの未来社
著者：久留島武彦(作)・いしいつとむ(絵)
価格：1,430円(税込)